

# 京都府埋蔵文化財情報

## 第42号

樋ノ口遺跡を山田寺跡にあてる考証-----	足利 健亮	1
樋ノ口遺跡の調査-----	伊野 近富	14
百済の栄華－韓国扶餘・伝天王寺跡試掘調査略報-----	金 鍾 萬 訳 松井 忠春	25
－平成3年度発掘調査略報-----		31
4. こくばら野遺跡	8. 下畑遺跡第6次	
5. 堤谷古墳群	9. 川向北1号墳・川向北遺跡	
6. 野中城跡	10. 鹿谷遺跡	
7. 葉師遺跡	11. 燈籠寺遺跡 内田山A-3号墳	
海外だより 中国陝西歴史博物館の開館-----	磯野 浩光	47
府内遺跡紹介 53. 浄妙寺跡-----		51
長岡京跡調査だより-----		54
センターの動向-----		57
府内報告書等刊行状況一覧-----		59
受贈図書一覧-----		65

1991年12月

図版 百済の栄華（韓国扶餘・伝天王寺跡）



(1) 遺跡全景（北から南へ）



(2) 重成基壇細部状況（西北隅、西から）

## 樋ノ口遺跡を山田寺跡にあてる考証

足利 健亮

はじめに

京都府埋蔵文化財調査研究センターが、平成3年4月から7月にかけて発掘調査を実施した樋ノ口遺跡の調査成果は、7月20日付朝刊各紙の記事にとりあげられ広く公表された。遺跡の位置は第1図に矢印の先の二つの黒点でもって示すところで、京都府相楽郡精華町と木津町にまたがる。近鉄山田川駅の北西300m余りの地点で、遺構出土地点の小字は、精華町大字山田小字心蓮寺および木津町大字相楽小字城西である。

調査成果公表時の大勢は、この遺跡を奈良時代の離宮跡ないし離宮クラスの施設とする見解に傾いていた。筆者の見るところ、この解釈には根拠が乏しく、疑問が多い。そこで改めて発掘成果、文献史料、石塔・梵鐘等の伝存遺物、小字地名等を厳密に再検討し、この遺跡を山田寺跡とする私見をとりまとめたものが以下の小文である。

### Ⅰ 考古学的調査の成果

現地説明会資料及び現場担当の伊野近富調査員ほかの教示に基づいて遺構・遺物の要点を摘記すると、次のようになる。<sup>(注1)</sup>

〔遺構〕 地下約40cmに中世耕作跡。その下20cmに奈良～平安初期遺構。この遺構は、奈良前～中期遺構とそれ以後平安初期までの遺構との、少なくとも二つの時期に区分される。前者を当遺跡Ⅰ期、後者を当遺跡Ⅱ期と称する。注目すべき遺構としては以下のものがあげられる(第2図参照)。

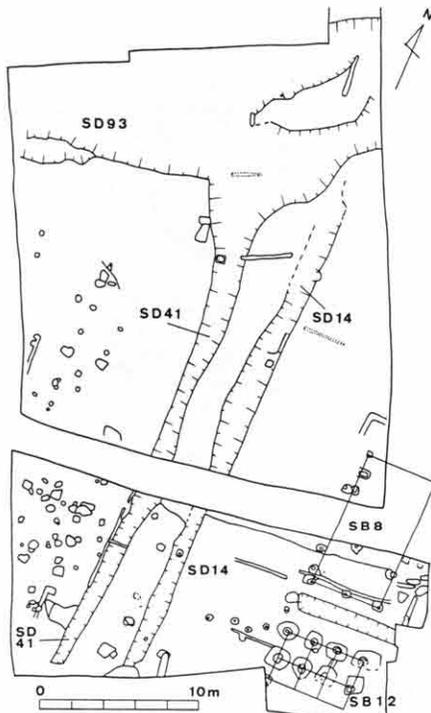


第1図 遺跡の位置(精華町小字図)

- (1) 築地塀雨落ちと思われる南北方位の溝2本(SD14、SD41)。築地塀は瓦葺き。——当遺跡Ⅰ期
- (2) 大溝か、または池かといわれるE12°S方位(南辺)の遺構(SD93)——当遺跡Ⅰ期
- (3) 築地塀の東に、東西3間、南北2間、総柱、柱径30cm、の建物(SB12)。築地塀と同時期。門あるいは倉あるいは楼。柱間1.8~1.5m。——Ⅰ期
- (4) 築地塀の東、SB12の北に、東西2間、南北5間(か)の建物(SB8)。SB12より新しく、築地側溝が埋まった時期と並行。9世紀末が下限。N1°~2°E。——Ⅱ期
- (5) 築地塀の西に、南北2間、東西2間(以上)の建物があったか(現説資料図から推定)。——Ⅱ期か

〔遺物〕

- (1) 緑釉陶器、60点以上(現説資料)。
- (2) 二彩・三彩陶器、100点以上(現説資料時点、60点)。  
〔三彩は7点で特に小壺、多口壺に注目された〕
- (3) 灰釉陶器、15点(現説資料)。
- (4) 灰釉羊頭硯(日本初)、ほか硯10点。
- (5) 白磁3点(現説資料)。



第2図 遺構配置図(『現説資料』から)

- (6) 銅製品2点。
- (7) 土馬2点。
- (8) 二彩の平城宮式軒丸瓦破片、2点。
- (9) 平城京Ⅱ期瓦多数。朱塗の柱の存在を推定させるものもあり。平城京Ⅲ期瓦(鬼瓦)も。——当遺跡Ⅰ期
- (10) 在地焼成瓦。——当遺跡Ⅱ期
- (11) 中世~近世初頭の信楽焼、白磁、瓦器。

以上の遺構・遺物の出土状況のうち、特に注目を集めたのが、二彩・三彩陶器の出土量が平城京出土総量をしのぐ多さであるという点、また、二彩瓦が平城京外で出土したのは、ここが初めてであるという点である。

この事実ののち、この遺跡が平城宮に準じるもの、つまり離宮か、というふ

うに導かれていった。この際、現地説明会資料は、二彩・三彩出土地(全国で300か所以上)の3分ノ1は寺院跡である事実に触れてはいたのであるが、この遺跡地が「中世には耕地であった」事実があるため、ここは中世まで存在した山田寺ではあり得ないという結論を導いてしまったのであった。しかし、後述するように、ここが中世に耕地であったことは、山田寺を否定する材料にはならないのである。

## II 離宮説批判

離宮説の一つの根拠は、『続日本紀』天平宝字7年(763)10月4日の、「幸山背国授介外従五位下坂上忌寸老人外従五位上、従五位下稻峰間連仲村女従五位上」との記事にありとされる。この記事に基づいて離宮を考えようとする説には、離宮と行宮の混同がある。上記の行幸が離宮に関わるといえる証拠は何もない。昼食などに行宮に立ち寄った可能性はあるが、行宮は、常設である必要がなく、又、誰かの家を1日借用しても行宮となる。天平神護元年(765)の称徳天皇紀伊行幸の際には、事前に遣使して行宮を作らせている記録(9月21日条)があるが、上記山背行幸にはその記録はない。日帰りであった可能性さえある。

離宮説の第二は、ここを「因幡宮」と考えるものである。765年10月～閏10月の称徳紀伊行幸の記事は

10月13日「行幸紀伊国。(略)是日、到大和国高市郡小治田宮」

14日「巡歴大原長岡。臨明日香川而還」

15日「到宇智郡」

16日「進到紀伊国伊都郡」

17日「到那賀郡鎌垣行宮」

18日「進到玉津嶋」——目的地。

25日「還到海部郡岸村行宮」

26日「到和泉国日根郡深日行宮」

27日「到同郡新治行宮」

28日「到河内国丹比郡」

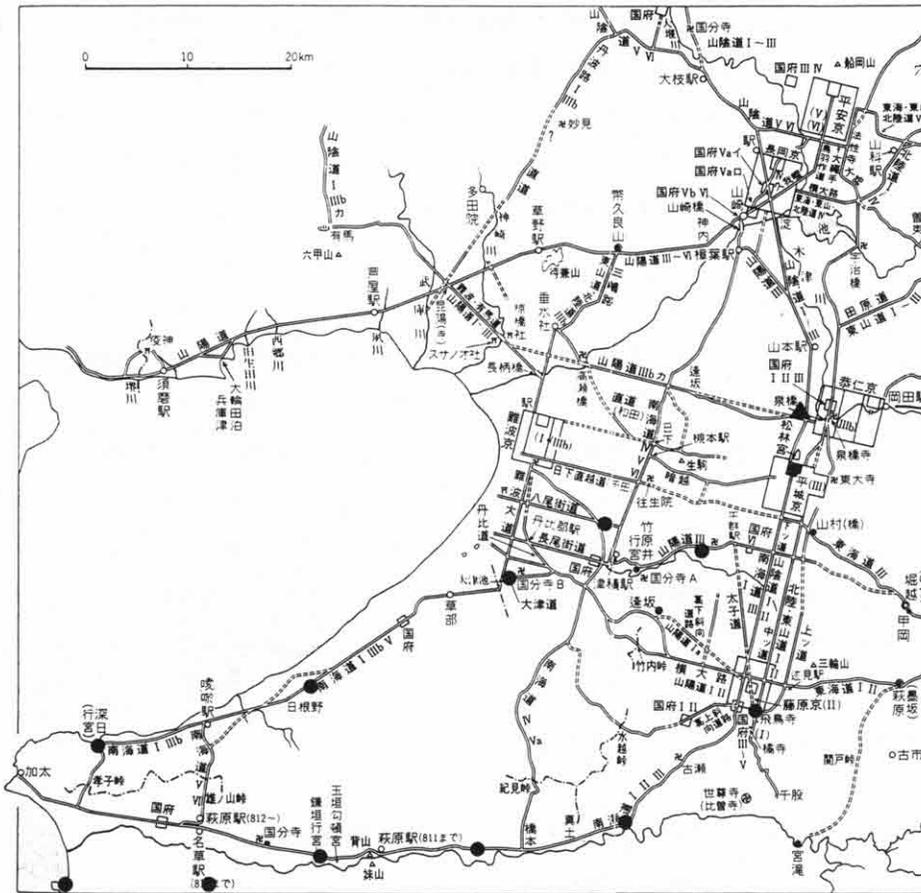
29日「到弓削行宮」

30日「幸弓削寺」 礼仏。奏楽・舞。

閏10月1日、弓削寺、智識寺に食封を捨す。

3日「還到因幡宮」

と続く。最終コースというべき都への帰着記事は欠落している。



第3図 称徳玉津嶋行幸ルートの大要  
 黒丸印地点はおおよその行宮想定地。黒三角印地点は樋ノ口遺跡。

この因幡宮は、常識的に見て平群郡斑鳩町稲葉車瀬に求めるべきである。理由は、

- ①宮名と地名の合致、
- ②稲葉車瀬地点は弓削と平城京の間を占め、且つ弓削-稲葉車瀬、稲葉車瀬-平城京は、行幸移動距離として標準的なものである。
- ③行幸記事に山背のことなど全く見えていない。
- ④仮に弓削から清滝街道で樋ノ口遺跡に至ったとすると、それまでの1日移動距離の最長区間よりも長い移動距離となる。他に必然的な理由が全く見出せないのに、この長く且つ迂回路ともいふべき行幸コースを想定するのは、強引で説得力がない。

稲蜂間連中村女を「因幡中村」とする文献もある、ということが樋ノ口遺跡=因幡宮説の根拠の一つにされているらしいが、これは飛躍の最たるものといわねばならぬ。仮に百歩を譲ってこれを「根拠」として採用したとしても、因幡宮のあるはずの場所は稲蜂間=

稲八妻になるのだから、樋ノ口遺跡が因幡宮というふうにはならない。

以上、平城宮あるいは平城京をしのぐ三彩・二彩の出土量、平城宮瓦の使用、という発掘成果に、平城京北裏で且つ東西と南北の要路の交点という立地条件が重なって「離宮」を想定するムードが盛り上がったが、冷静に見ると樋ノ口遺跡の地点に離宮があったという文献的、地名的徴証は何もないことが判明する。このように、離宮想定はムードであったから、この段階で離宮さがしに走るのは危険なことであったのである。同類の遺物は有力寺院でも出土しているのであるから、まず離宮か寺かその他のもの(例えば官衙)かということに、議論を集中させるべきであった。

極端に言えば、以上のⅡ章の議論自体が、この段階では無駄な議論に類するものであったと述べて差支えない。

### Ⅲ 山田寺の想定

樋ノ口遺跡を何にあてるかに関して、現段階で最も有用な資料は小字名である。

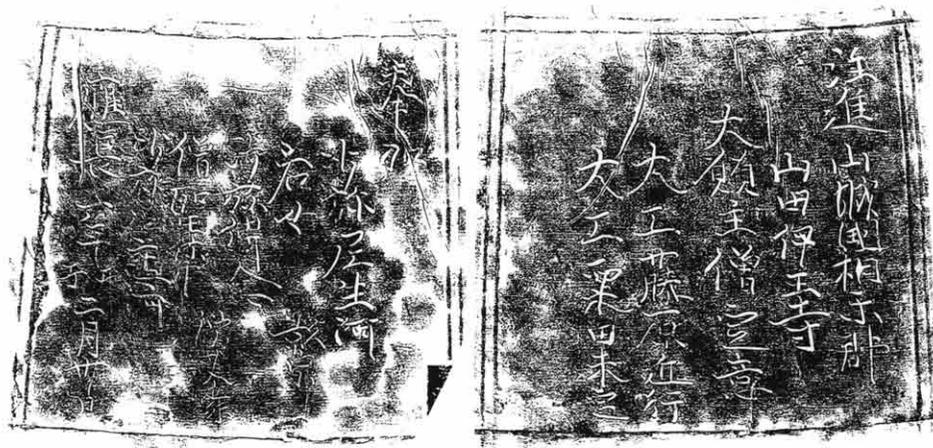
遺構出土地点は、精華町大字山田小字心蓮寺と木津町大字相楽小字城西である。心蓮寺の北には小字医王寺が隣接する(第1図)。これらの小字が山田寺に重なる。山田寺は、嘉吉元年(1441)作成の「興福寺官務牒疏」に、次のように記されている。

「山田寺 同郡相楽郡一引用者 山田郷朝日莊。僧房六字。皇極帝大化二年。元興寺道昭大徳開基。宣教大師再建。本尊宝生仏。承元三年炎上、正応二年再建」

さて山田寺の寺号は、正式にはサンデンジまたはセンデンジと音で読まれるものであったと考えなければならない。多分その後者であったろう。そう考える時、小字心蓮寺の名がにわかに注目されることになる。心蓮寺と称する寺が存在したことは知られていない。一方心蓮寺は地元でシンデンジと読んでいるという(伊野氏による)。この読みを傍証するものが、北隣の小字医王寺にある新殿神社である。地名、寺社名は口から口へ「音」で伝承されることが多く、廃絶して旧字が伝わらないような場合は伝音に基づいて当て字が用いられることが稀でない。かくて心蓮寺、新殿神社の称は、サンデンジまたはセンデンジの転ではないかとの考えが浮上する。

以上によって、ここ樋ノ口遺跡が山田寺であった可能性が見えてくる。離宮か寺か官衙かでなしに、この場合は一気に山田寺という固有名の可能性が見えてきた。山田寺を追いかける前提が成立したと言ってよい。

ここで注目されることになるのが、樋ノ口遺跡の西3kmの、大字柘榴在紫雲山極楽寺(浄土宗)に蔵せられる「山田伊王寺」銘梵鐘である。銘は刻銘で、銘文の全体は次の通りである。



第4図 極楽寺梵鐘拓影

〔1区〕

注進山城国相楽郡

山田伊王寺

大願主僧定意

大工藤原近行

大工粟田未定

〔2区〕

奉加

沙弥尼生阿

若女 影宗

沙弥得念

僧美舜  
僧聖算

沙弥尼慈阿

應長二年壬子二月卅日

なお、3区、4区には銘文の刻印がない。この梵鐘は総高79.0cm、口径47.5cmと小ぶり  
で、住職佐伯恵覚氏によれば、これを蔵していたことに気付いたのは比較的近年のことで  
あったという。昭和58年4月に京都府の文化財に指定され、その指定書に、2人の「大工」  
は山城の鋳物師であったとの判定が記されている。現在は鐘楼につられて活用されている。

さて刻銘のうち注目すべきは、「山田伊王寺」の寺号と、「應長二年(1312)」の紀年で

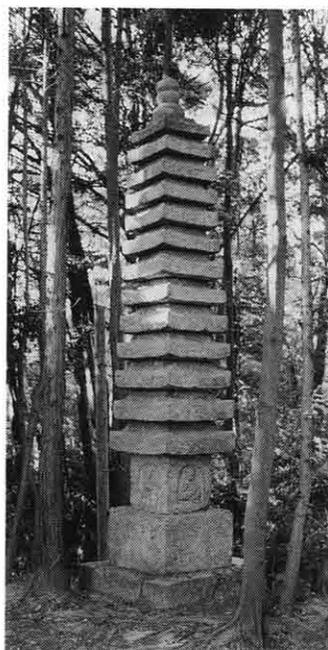
ある。寺号は「医王寺」の小字名と重なる。しかも寺号ははかならぬ「山田伊王寺」である。この場合、「医」ではなく「伊」の字が使われていることは、問題ではない。文字に対するこだわりがあまりなかったことは、多くの例で傍証可能である。「医」という字は当時は無く、本来「醫」であったから、これを刻むのを困難として、便宜的に「伊」字を用いたという事情があったかもしれない。いずれにせよ伊王寺は医王寺と同寺号である。

ところで、小字医王寺にある新殿神社の境内には、延徳3年(1491)造立の刻銘がある花崗岩製十三重石塔(重文)が残っている(第5図)。その上、医王寺薬師堂と称する小堂が今に残り、付近には鐘楼跡もある(『精華町の寺社と美術(改訂版)』、精華町発行、1991年、78ページ)。すなわち1491年に、ここには寺があった。小字名から見て、医王寺=山田伊王寺であったと考える以外にない。

現在薬師堂には、本尊として薬師如来坐像が安置されている。上引『精華町の寺社と美術』によれば、この像は江戸時代の作という。ところが、柘榴の極楽寺にも薬師堂があり、そこには、同上書が室町時代かとする、像高37cmの薬師如来坐像が安置されている。極楽寺の開基は不明であるが、同上書によれば、「元禄16年(1703)や享保17年(1732)の当寺什物の仏画があることから、江戸時代の半ばにはすでに存在していたのであろう」という。住職の佐伯師も、極楽寺に宝暦(1751-63)の棟札があることを述べているが、そのほかに、それ以前における焼災の口伝(永正四年(1507)の「柘榴焼了」記事のことか〔大乘院寺社雑事記〕)もあること、また毎年3月初頭に大般若経600巻の転読が行われること、薬師堂・薬師如来があつて、現在浄土宗でありながら祈願寺としての性格も合わせ持つことなどに言及している。さしあたりこれらのことを敷衍する用意はないが、これらは医王寺の法灯が何らかの事情で極楽寺に移行継承されたことを示すものかもしれない。後考をまつ意味で、ここに記しとどめる。

とにかく、山田伊王寺銘梵鐘が山田医王寺から極楽寺へ移ったことはまちがいがなく、薬師如来坐像も同時に移った可能性が考えられてよい。若しそうだとすれば、ではなぜ3km離れた柘榴の地へ移ったのか。これについては、あとで改めて私見を述べる。

記述が繁雑になったが、十三重石塔の建立(1491)から少し遡ってみたい。



第5図 新殿神社の十三重石塔

「興福寺官務牒疏」によれば、承元3年(1209)に山田寺が炎上し、正応2年(1289)に再建されている。その間80年、これは旧寺地の記憶は残っているが、旧寺地が荒地になっても、耕地化していても不思議でないタイムスパンである。炎上に際して本尊(宝生仏)も焼失したかどうかは不明と言わざるを得ないが、仮に焼失をまぬがれたとしても同地に安置されて80年を経たのではないから、再建にあたって本尊が代わって不思議でないタイムスパンでもある。そこで、再建にあたっては、伽藍が旧寺地の背後の丘上に営まれ、本尊が薬師如来に代わったことによって寺号も山田伊(医)王寺と称されることもあった、と考えることは十分可能である。寺地が背後の一段高い面に上がった例として、私は武蔵国分寺の例を知っている。山田伊王寺刻銘の梵鐘が鑄造されたのは、再建の23年あとの応長2年(1312)である。それからおよそ130年のちの嘉吉元年(1441)官務牒疏に僧房6字の存在が記録されたことは先に記した通りで、一応寺運は保たれていたと見られる。十三重石塔はその50年後の1491年建造。依然寺運は衰微していない。が、時は文明17年(1485)にはじまった山城国一揆の最中であつた(明応2=1493=年に国一揆は崩壊)。その前もその後も、南山城は長い争乱がくり広げられる。争乱で山田寺が例えば焼災をこうむったというふうな直接の史料を得ているわけではないが、衰微傾向は考えておいた方がよいであろう。そうした時期を経たのちの天文16年(1547)に至って、山田庄天王宮本殿が造立されることとなる。のちの新殿神社本殿のことである。銘文は次の通りである。

「上棟 山城国相楽郡山田庄天王宮天文拾六年丁未十一月十三日年預衆大工藤原玉次  
左衛門九郎 力千代」(『精華町史』史料編Ⅰ)  
左衛門五郎

時の社名は天王宮であつた。『精華町の寺社と美術』は、「古くは植樹神社と称した。田辺町の朱智神社から勧請されたというのが、詳細は不明」と記す。植樹神社と天王社と、どちらの呼称が古いのか、並行していたのかは、まだ調べていない。憶測であるが、1547年よりそれほど古い創祀ではあるまい。そこは寺院であつたのだから。いずれにせよ、のちに社名は新殿神社となる。音で伝わって文字がわからなくなった「山田寺」の寺号か、またはそれが地名化したシンデンジに拠って、この社名となった経緯が推測できる。梵鐘や、本尊薬師如来の極楽寺への移行が、神社成立の前であつたか後であつたか。それは不明といわざるを得ない。以上をとりまとめて年表ふうにすると、次のようになるだろう。

- ①大化2年(646)、道昭開基。
- ②宣教大師再建、本尊宝生仏(密教仏。金剛界五仏の一つで南方に位置する)。
- ③承元3年(1209)、炎上。本尊も焼失か。
- ④正応2年(1289)〔背後の丘に〕再建。本尊薬師如来=医王仏。故に山田医(伊)王寺とも呼ばれた。旧寺地は耕地化に向かう。発掘結果の「中世には耕地であつた」との所見

は、これ以後の「遺構面」を語られると思われる。

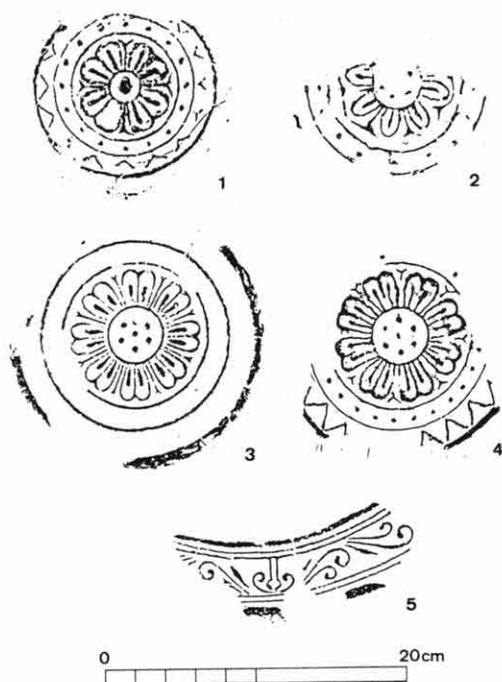
- ⑤応長2年(1312)「山田伊王寺」銘梵鐘鑄造。
  - ⑥嘉吉元年(1441)、僧房6宇存在(官務牒疏)。
  - ⑦延徳3年(1491)、十三重石塔建立。
  - ⑧天文16年(1547)、天王社本殿造立。 その前後、山田(医王)寺急速に衰微。梵鐘・薬師如来、極楽寺へ移る。のち、社名は新殿神社となってゆく。
- 以上、万事つじつまが合う、と言える。

#### IV 古代山田寺の隆盛について考える

上記年表の創建伝承には問題がある。『続紀』文武天皇4年(700)3月10日の「道照和尚物化」記事によれば、大化2年には和尚はまだ18才であった。白雉4年(653)に25才で入唐し、斉明天皇7年(661)か天智天皇4年(665)かといわれる帰国後に本格的な仏教者として活躍したと見るべきであるから、少なくとも道昭(照)創建のことか、大化2年の年次のいずれかに誤りを含む。これは道昭宇治橋創建の伝承と同工異曲の疑点である。ところで大和盆地南部、飛鳥の山田寺も、創建は大化のころである。大化5年3月、蘇我倉山田石川麻呂が失脚するが、その大臣に二子の法師あり、長子興志がこれより先、倭にありて其の寺を造る、というふうには『日本書紀』は記す。ことによると樋ノ口遺跡に想定される山田寺の創建伝承には、飛鳥山田寺の創建伝承が混入しているのかもしれない。

いずれにしても、今年発掘調査の限りでは樋ノ口遺跡は8世紀前半から始まるようであるから、そうするととりわけ再建者とされる「宣教大師」が注目されることになる。宣教は、玄昉・行基・良敏・行達・隆尊・良弁と並ぶ義淵僧正七上足の1人であった。『三国仏法伝通縁起』中、法相宗条によってそのことがわかる(横田健一「義淵僧正とその時代」、『橿原考古学研究所論集』第5)。要するに天平期の高僧の1人で、「興福寺官務牒疏」によれば、山城国葛野郡嵯峨の智福山法輪寺について「養老三年義淵僧正開基、天平六年(734)宣教大師中興」と見えているのをはじめとして、河内国交野郡芝村郷の尊延寺(天平3年)、同郡中宮郷百濟寺、同郡開元寺・徳泉寺・津田寺(共に年次不記)、近江国栗太郡鈎郷八葉山蓮台寺(天平19年)などの開基僧として、また近江国坂田郡丹生郷靈山寺山下における七箇精舎の建立(神護景雲3年)僧として記されている。これらの記載によるならば、山田寺の再建(中興)も、天平期と想定することに問題はない。山背国や河内国での活動期が天平3～6年ごろにあったらしいことからすれば、山田寺の中興もその時期と見ても大過ないように思われるが、ここではあまり急いで限定しないでおこう。

そこで、遺物の検討に歩を進める。佐原 真氏らの教示によると、釉薬をかけた瓦は法



第6図 軒丸瓦・軒平瓦拓影(『現説資料』から)

華寺、大安寺、長屋王邸にも出土するという。また、普通の平城宮瓦が大寺院で使われている例も少なくないという。三彩多嘴壺は薬師寺東院で出土している(『薬師寺発掘調査報告』本文編、153頁)。むろんそこでは二彩、緑釉も出土している。三彩小壺は祭祀遺跡にも見られるという(佐原 眞)。つまり、遺物では樋ノ口遺跡の性格を特定できない。寺院であっても、遺物の面で不都合はないということである。

義淵は、「大宝3年(703)3月24日に僧正に任ぜられ、神亀5年(728)10月20日に卒するまで、実に25年間もの長きにわたって僧正の職にあった。すなわち藤原京時代より平城京時代初

期、八世紀初頭の四分ノ一世紀の間、日本仏教界の最高の指導者であった。」(横田健一上引論文「義淵僧正とその時代」)。大宝3年当時大納言であった藤原不比等は、慶雲5年(708)右大臣となり、養老4年(720)に没するまで太政官の首班として、義淵とは協調してきたと横田氏は述べる。不比等のあとを受けた長屋王と義淵は衝突があったが、長屋王は天平元年(729)2月に失脚、同年8月に藤原夫人=光明子が皇后になることは周知の通りである。「宣教大師」が山田寺を興す(再興)のはその数年後である。宣教は義淵の高弟でしかも時代は聖武-光明皇后による崇仏の盛期を迎えていた。疫病に対応するため、諸大寺に經典の転読や写経が求められることも多かった時代である。宮廷からのさまざまな援助があったであろうことを想定するのは、それほど不都合なことでない。写経を想定すれば、羊頭硯など10点余りの硯の出土にもことさら注目される。

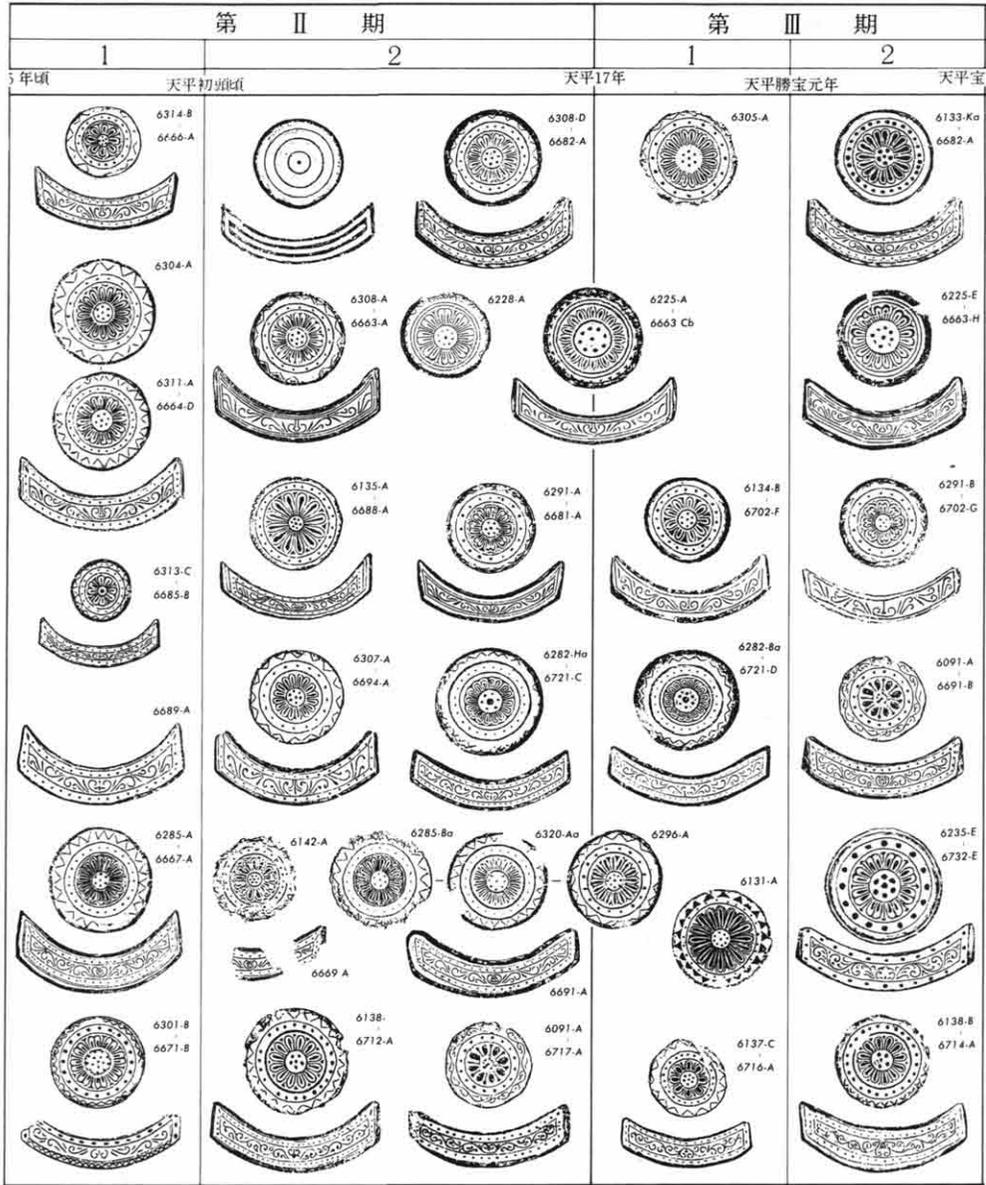
樋ノ口遺跡出土瓦の年代がまた、天平と推定される山田寺再建期にたいへんよく合致する。

現説資料(第6図の) 1. 軒丸瓦 : 平城宮瓦編年(第7図)の6313-C=II-1期

現説資料2. ※軒丸瓦 : 平城宮瓦編年の6314-B=II-1期

現説資料3. 軒丸瓦 : 平城宮瓦編年の6308-A・または6308-D=II-2期

現説資料4. 軒丸瓦 : 平城宮瓦編年の6311-A=II-1期



第7図 平城宮瓦編年図(平城宮発掘報告書13、1991年3月による)

現説資料 軒平瓦 : 平城宮瓦編年の6663-Aか=II-2期  
 すなわち、平城宮II-1期、およびII-2期前半に集中している。※印を付した2は伊野氏は6134-Bとするが、私は採らない。さて、平城宮II-1期とは養老5年(721)ころから天平初年(元=729)ころ、II-2期は天平初年ころから天平17年(745)の間だという。まさに宣教再興の時代と合うといわねばならない。

## V 結論と補遺

以上要するに私は、樋ノ口遺跡が何であったかを特定することができる史料が、現段階では「心蓮寺」および「医王寺」小字しかないことに立脚してこれを山田寺跡と想定し、そう想定した場合には他のすべての史資料が無理なく、合理的にこの想定に合致することを論証した。文章上、あるいは行論上のまずさは残るかもしれないが、殆どのことは述べつくしたと考える。この段階で私は、樋ノ口遺跡は99%山田寺跡に間違いないと断ずる。あえて1%を残したのは、以上によってもなお偶然、全く史料にあらわれなかった、従って全く未知の他の遺跡がここに姿をあらわす可能性までは否定すべきでないと思うからである。しかし、もしそうしたものが現われたとしても、それは学問とは関係のないことであって、上述論証作業の敗北とはならない。論理によって構築された解答という観点に立っていえば、樋ノ口遺跡は100%山田寺跡である。

ところで、心蓮寺、医王寺などの地名がなぜ残ったかについて、一言しておかねばならない。それは次の通りである。山田寺(ないし山田医王寺)は、「官務牒疏」の内容を信頼できるものと見る限り、15世紀中葉までは確実に存在した。私の推定ではその前面平地に13世紀初頭まで古代山田寺が存続していた。後者の寺地は多分一旦荒地と化し、次に耕地化した。つまり山田寺に代わる「施設」がその後成立したことを聞かない。こういう場合は、山田寺が地名化して残るのである。ただし、「音」で伝承されたから、字は変わった。

「医王寺」小字の場合も、そこに神社が勧請されたが、山田医王寺の法灯は細々ながら受けつがれ、人々の記憶から消え去ることがなかった。為にその「医王寺」の部分が、薬師堂・薬師仏の側面から地名化し、一方「山田」の部分が「新殿」という社名に復活して伝え残されることとなった。以上のように考えて、まず誤りないと思う。

最後に、なぜ柘榴に梵鐘(と薬師如来坐像)が移ったかについて、若干の私見を付け加えたい。これは、柘榴が朝日荘(「官務牒疏」)の西限(上流限)であったのではないかと、という推測とからむ。朝日荘のことは、『大乘院寺社雑事記』延徳2年(1490)8月19日条に「山田之朝日松谷書状在之---」とあり(『精華町史』史料編1、515頁)、また『実隆公記』永正7年(1510)4月17日条に「所詮如朝日代官職事、可被申付下津屋之由被仰下処」(同上、580頁)などとあるが、範囲の推定に役立つようなものは見出し得ていない。しかし、竹内理三『莊園分布図』上巻(吉川弘文館、昭和50年)も示すように、およそ山田川の谷一円という見当でよいと思われる。

そこで注目されるのが、大字柘榴小字向井に鎮座する日之出神社の雨乞い石のことである。これは「もと奈良県生駒郡に鎮座していた。延暦年間(782-806)、御神体の大石がここまで流れ着いたという。神石と称し、社殿の傍にある。現在は雨乞い石といい、かんば



第8図 榎ノ口遺跡周辺空中写真

つ時には川にこれを入れて祈るといふ」(『精華町の寺社と美術』)。木にひっかかって石が留まったので柘榴という地名が成立したというが、それはさておき、上記伝承はその雨乞い石が庄園の榜示石であることを示唆する。日之出神社の祭神は光明皇后で、これは石が流れてきた時点とは合致しない。それはどうでもよいことで、要するに光明皇后の神格を付与して石がその位置を動かないようにした経緯を考えるべきである。播磨の鶴庄の榜示石が「太子の投げ石」とされて原位置が保たれてきた例を想起させる話である(谷岡武雄『聖徳太子の榜示石』学生社、昭和51年)。社名が日(之)出神社。これは「朝日」庄の榜示としてふさわしい。光明の名もこれに重なるといえる。そして、この荘域が、京北班田図とは異なる大和・山城界(すなわち現、奈良・京都府県界)を結果したのではないか。

以上のように考えることで、京都—南都回廊でくり広げられた15世紀末～16世紀の戦乱を避けて、本尊や梵鐘を庄域の西の最奥の寺へ移した(避難させた)というふうには考えられないであろうか。それにもかかわらず、上述のように柘榴は国一揆終末期の永正4年(1507)10月1日の戦火にまきこまれて焼かれるのであるが。或いはむしろこの焼亡以後にかえて「安全」となった柘榴へ移されたというふうなこともあったかもしれない。

最後に榎ノ口遺跡周辺の1973年撮影空中写真を、実体視可能にして提示し、今後の調査の進展を期待して私見の開陳をひとまず終えることにしたい。

(あしかが・けんりょう＝京都大学教養部教授・当センター理事)

注1 現地説明会以後の調査の進行にしたがって、新たな遺構がみつきり、調査成果に一部変更が加えられている。それについては本号伊野論文を参照されたい。

## 樋ノ口遺跡の調査

伊野 近富

### 1. はじめに

今回の調査は、京奈バイパス建設工事に先立って、日本道路公団大阪建設局の依頼によって実施したものである。調査地は奈良県境に近い、相楽郡木津町相楽と同郡精華町山田にまたがる約1,100㎡で、平成3年3月に試掘調査をし、同年4月15日から8月8日まで本格調査を実施した。その結果、100点に及ぶ二彩・三彩陶器を始め、多量の遺物が出土し、遺跡の性格付けが急務となった。7月20日に実施した現地説明会では、離宮説がクローズアップされたが、これには有力な異論があるのも事実である。本稿では、まず調査成果の概要を示し、その後、遺跡の性格に関する解釈を示して、大方の批判を受けたい。

### 2. 調査概要

樋ノ口遺跡は、木津川に注ぐ山田川によって開析された、幅約400mの谷の北東端に立地している。そこは、幅約40mの河岸段丘が東西方向にのびており、その東端に近い所にトレンチを設定した。試掘調査段階では、さしたる遺物は得られなかったが、調査地の東方の段丘斜面に奈良時代の瓦が散乱しており、遺跡の存在を示唆していた。

古代の環境としては、平城宮から北へ約4.8kmの地点に相当し、歴史地理学の足利健亮氏による古山陰道と古山陽道併用の道が、調査地の東方約300mに想定されている。また、恭仁宮から西へ約7kmの地点でもあり、同氏によって、恭仁宮段階の山陽道として推測されている道は、この開析谷を通ったとされている。

以上のように、古代の環境としては、2つの道の交差点にはほぼ相当しており、抜群であったと想定できる。

#### 遺構の概要

調査地は、現代では水田と畑として使用されていたが、この下約40cmから中世頃の耕作跡が検出された。さらに約20cm下で奈良時代から平安時代初期にかけての遺構が検出された。ここでは、古代の遺構にしほって説明したい。

古代の遺構の種類は、溝や土坑や柱穴などである。これらを層位的にみみると、整地層の上下によって2時期に分けることができる。ここでは仮りに、古い方をA期とし、新

しい方をB期として説明したい。

A期の遺構

この期に確実に属するのは、SB12・SA37・SD14・SB49・SB71・SD93である。後述するSB8とこの期のSA37とは重複関係があり、確実に古いことが分かる。なお、埋土は灰色土である。



第1図 調査地位置図

S B 12は、調査地の南東隅で、検出された総柱の掘立柱建物跡である。東西3間(西から1.8m、1.5m、1.8m)、南北2間(1.8m等間)以上である。柱の下部がそのまま残っていたものもあり、その直径は約30cmと大きい。この建物は柱を抜き取った痕跡はなく、次のB期にも使用されたい。N 1°20′ W。

S D 41は南北方向(N 0°30′ W)の溝である。幅1～2m・深さ0.15mである。南端はトレンチ内で検出された。また、北端はS D 93と接した地点であり、これも検出された。最長35mである。底面はほぼ平坦であるが、北流するように緩やかに傾斜している。この溝の東側には平坦面があり、築垣があったと想定している。

S B 49は、東西棟(W 1° S)で、柱を抜いた後で瓦を多数、掘形に廃棄していた。東西3間以上(2.4m等間)、南北2間(2.4m等間)で、北に1間(1.2m)の廂をつけていた。東西棟の建物跡はもう1棟(S B 71)ある。すべて掘立柱建物跡である。

S D 93は、東西方向の溝である。西流するように掘られていた。西端では一本であるが中央から東は南北2流あり、その一部はS D 94と接続している。南側のそれはW 9° Sである。幅1.4～5m・深さ0.3mである。

#### B期の遺構

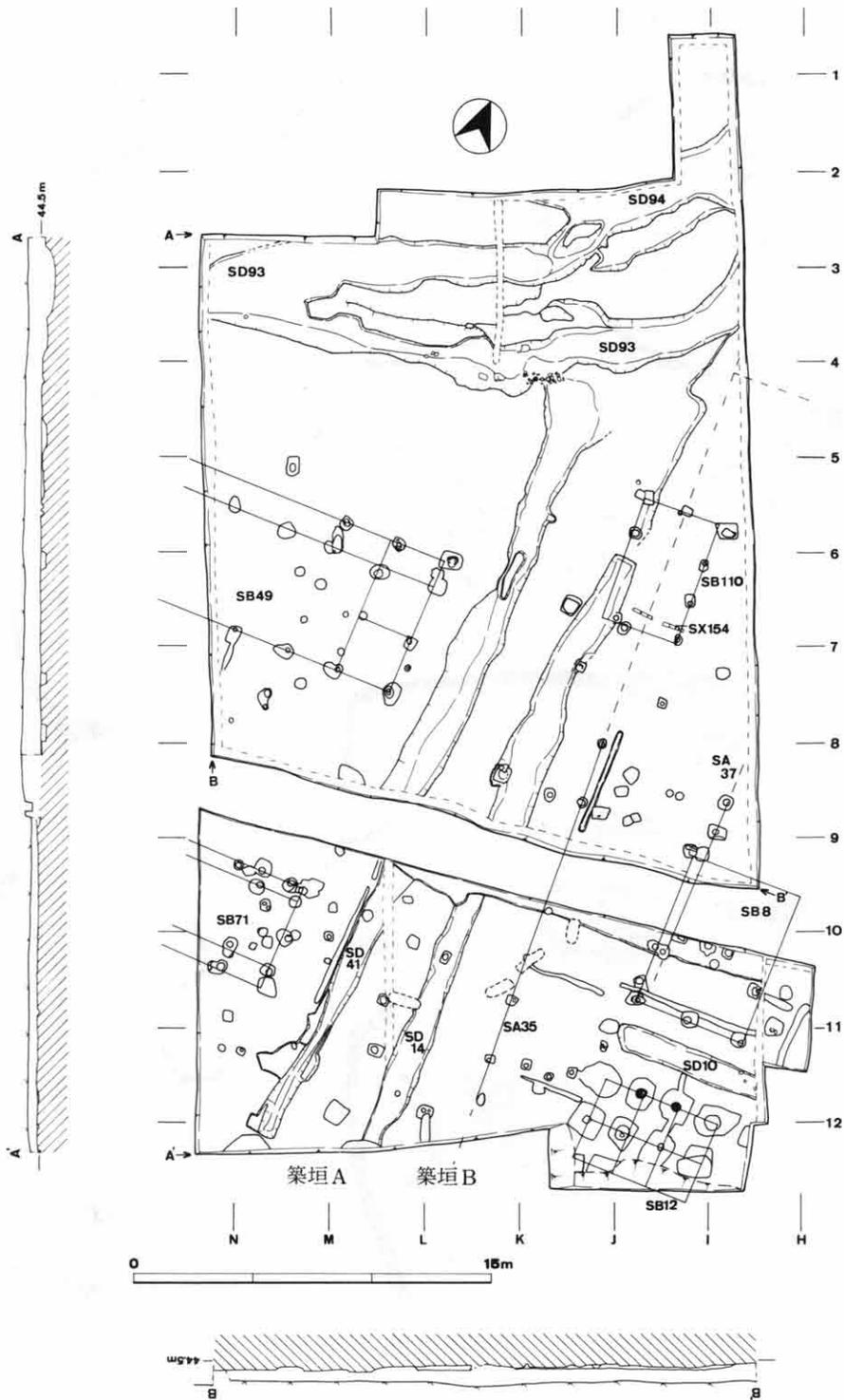
この期に確実に属するのはS B 8・S D 10・S D 14である。埋土は黒褐色である。

S B 8は、現地説明会当時南北5間程度と考えていたが、北部の柱穴は柱筋が通らず、柵S A 37として把握した。その結果、南北3間程度(2.4m等間)、東西2間(2.4m等間)となった。N 2°20′ W。S D 10はこれの雨落ち溝と考えている。

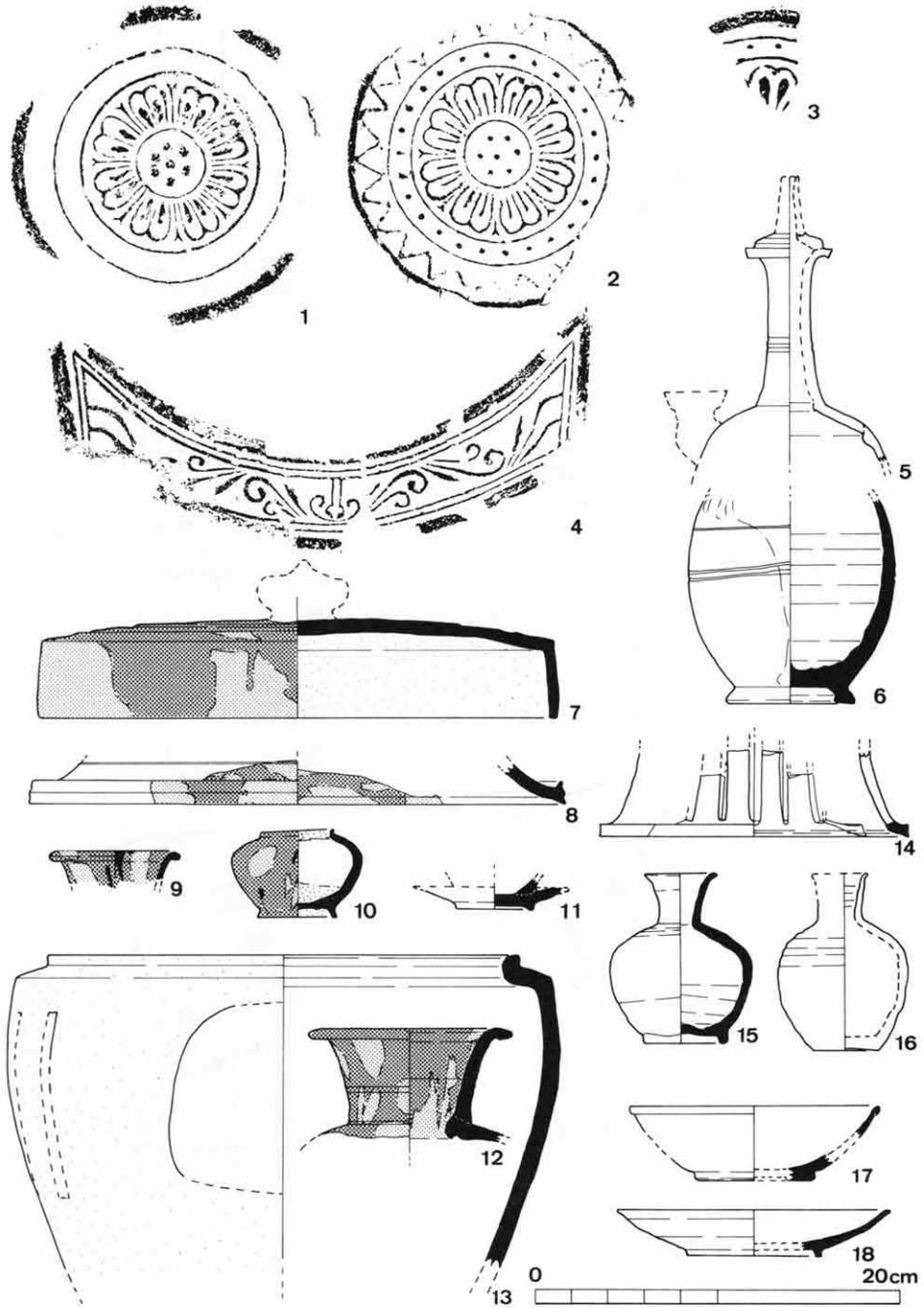
S D 14は南北方向(N 0° W)の溝である。幅1m・深さ0.1mである。当初は、S D 41とあわせて築垣の両側溝のひとつと考えていたが、S D 14の北部で丸瓦を並べて置いた暗渠と思われる施設(S X 154)が検出されたため、その上に築垣を想定する必要ができた。したがって、現段階ではA期の側溝(S D 41)とその東に築垣A、B期の側溝(S D 14)とその東に築垣Bを想定している。但し、築垣BのところにはS A 35や、門と思われるS B 110があるので、柵であった可能性が高い。

S D 93とS D 41との接点に、瓦などで固めた地点があり、これによってB期の段階にはS D 41を埋めたと判断した。すなわち、崩落を防ぐ施設として理解した。これはS D 93がB期にも使用されたことが前提であるが、埋没した状況によれば、中層は砂層で構成され、上層は粘質土であるので、一時期洪水にあい、その後修復しないままにされていたと理解できる。なお、上層にはB期の終末の遺物が包含されていた。

S D 94は、S D 93の北側を流れる東西溝で、一部でS D 93と接続している。この溝の北側は、黄色粘土層が比較的高く遺存しており、削平されなかったことを示している。現段



第2図 遺構配置図



第3図 遺物実測図

階では通路＝道として理解している。

### 遺物の概要

出土遺物は整理箱で約240箱に達した。種類は、瓦・須恵器・土師器が多く、次いで緑釉陶器116点、二彩85点(内、瓦2点)、三彩13点、白磁5点、灰釉39点である。金属製品などは数点出土したにすぎず、木製品も柱根の他はなかった。A期とB期に属するものがほとんどで、他の時期のものは、埴輪1点、古墳時代後期の須恵器数点、中世の陶器や中国製磁器が10数点である。

軒瓦は合計68点出土した。詳細は次項で説明するが、平城宮所用瓦の占める割合が高い点が注目される。今回図示したのは2が平城宮6311B型式で平城Ⅱ期に属するものである(直径16cm)。1はその外区文様を省略し同心円にしたものであるが、平城宮6311系統といえるものである。ちょうど、難波宮式と平城宮式とが折衷したような形である。焼成は軟質の須恵器様で、灰色を呈する。3は平城宮6133系で、平城Ⅳ期に属するものか。4は軒平の8割を占める。平城宮6663A型式で、平城宮所用瓦である。平城Ⅱ期に属する。押熊瓦窯製品の可能性がある。瓦は平城Ⅱ期からⅣ期にかけてのもので、中でもⅡ期が多数を占める。使用されたのはA期と思われ、特に築垣付近で多数出土したことから、そこで使用された可能性がある。瓦の内、数点ではあるが下面に朱が筋状に付着しており、朱塗りの建物で使用されたことが知られる。

5・6は原始灰釉陶器と言うべきもので、釉の発色は悪い。器形は浄瓶である。8世紀後半に属する。これと同時期の猿投産甕も1個体出土した。

7・12は二彩陶器である。7は直径29cmもあり、日本最大の薬壺蓋と言えよう。12は瓶で、正倉院と同様の大きさである(なお、図中アミが濃い方が緑色で、やや薄い方が透明釉である。そして、もっとも小さく点状であるのが褐色釉である。また、もっとも薄い方が黄緑色を表現している)。

8～10は三彩陶器である。8は瓶あるいは多口瓶の高台で、これも日本最大と言って大過なからう。9は多口瓶の口縁部である。10は小壺である。今回出土した中でもっとも発色がよい。内面中央部は露胎のままである。これら二・三彩陶器の胎土は黄色味がかかった軟質のものである。8世紀中葉を中心とし、一部後葉にかかるものと考えている。

13は緑釉陶器のカマドである。軟質で黄緑色の釉をかけている。14～16は須恵器である。14は円面硯で、8世紀に属する。15・16は壺Mと奈良国立文化財研究所で分類されているもので、前者が8世紀末、後者が9世紀後葉に属する。いずれも陶器タイプである。17は白磁碗で、中国の定窯か邢窯の製品であろう。9世紀。18は灰釉陶器皿で、9世紀に属する。

なお、土師器・須恵器は若干平城Ⅱ期のものがあるが、主体はⅢ期からである。量的にはⅢ期がもっとも多く、次いで長岡京頃で、最終は10世紀初頭頃である。

### 3. 樋ノ口遺跡の特質とその評価

遺構・遺物の概要について説明したが、この項では遺跡の特質について把握し、その後現段階での評価をし、大方の批判を受けたい。

**遺構の特質** まずA期については、瓦葺きと思われる築垣Aを中心として、西にS B 49・S B 71の東西棟を配置し、東にS B 12をおく。特に、後者は直径30cm以上の大きな柱を使用し、柱間も狭いことから倉や楼のような頑丈な構造物と目される。遺物の出土状況から言えば築垣Aの東方が中心部分らしい。とすれば、これを境に東方が内郭、西方が外郭というように、二重の区画施設が想定できる。築垣Aの西に側溝S D 41が機能したことは確実だが、この溝は12ライン付近で終息しているので、築垣もここで終息した可能性がある。この数m南は、現在段丘の端となり崖となっている。北はS D 93と接続している。

B期の遺構としては築垣Bが、同Aより5～6m東へ平行移動して設置された。但し、S A 35をこの期に属するとすれば、柵に変更されたことになる。そして、小規模な建物S B 110が柵に付設され、門として使用されたい。柵S A 35の西にはS D 14が側溝として設けられた。S B 12は継続して使用され、その北隣にはS B 8が建設された。築垣Bの西方には建物はなく、閑散とした状況である。東方には2棟の建物があるが、新造されたS B 8は小規模であり、全体的な状況としては、規模が縮小したといえようか。

A期の年代観は、平城Ⅲ・Ⅳ期に中心があるようなので、8世紀中葉から後葉にかけてとなる。この期に二彩や三彩などの多彩陶器や原始灰釉陶器などが使用された。土師器・須恵器のほとんどはこの時期に属する。なお、軒瓦の主体は平城Ⅱ期に属しており、ギャップがあるが、これについては、平城宮所用瓦であるので、平城宮で使用したものを恭仁宮造営時に移転した際、一部転用したと考えている。あくまでも、遺跡の造営開始は日常生活用品である土師器・須恵器の年代観で決めるべきであろう。

B期の年代観は、平城Ⅴ期(長岡京段階)以降、10世紀初めまでである。軟質の緑釉陶器や灰釉陶器、または中国製白磁碗などのように、都城を中心として出土する遺物構成となっている。

**出土軒瓦の特質** 今回出土した遺物の内、この遺跡の特質を端的に示すのは、多量の多彩陶器の存在と平城宮式の軒瓦の存在である。前者については、1990年5月現在の<sup>(資料)</sup>数値では、全国で76か所での出土が確認されている。その内33か所を占める奈良の例では、寺院跡が30%、宮殿や官衙、邸宅跡50%となっており、当該地の性格を十分示唆している。

付表1 軒丸瓦点数表

型式		点数	%	備考	型式		点数	%	備考
A		14	28.6	平城宮 (6311B) 平城宮 (所用瓦)	E		1	2	平城宮 (6313A)
	F					1			
B		15	30.6	平城宮 (6311系)	G			3	6.1
C					2	4.1	平城宮 (6314B)		
D		4	8.2					I	
軒丸瓦 合計49点					99.9%				
型式		点数	%	備考	型式		点数	%	備考
A		15	78.9	平城宮 (6663A)	C		2	10.5	平城宮 (6721系)
B					1	5.3			
軒平瓦 合計19点							100%		

付表2 平城薬師寺と同范関係

	城陽市		井手町	加茂町	本津町	奈良山				その他	種 ノ 目		
	平川 院寺	正道 遺跡	久世 院寺	井岡 院寺・ 瓦窯	慈 仁 宮	高 麗 寺	野 間 瓦 窯	歌 籠 瓦 窯	音 如 ヶ 谷			中 山 瓦 窯	薬 師 寺
8(6133H)			○								○	○	
6225 A			○								○	○	
6282 A	○	○	○									○	
11(6282 B)	○			○							○	○	
13(6282 H)	○				○	○					○	○	
16(6291 B)	○	○									○		
24(6314 A)	○	○									○	○	
6320 A a	○				○	○						○	
6285 斬	○												
212(6663 C)			○								○	○	
220(6667 B)	○	○		○							○		
225(6691 A)	○		○	○							○	○	
232(6702 G)	○	○									○		
6721 A				○								○	
231(6721 C)	○			○							○		
6721 D			○									○	
6761 A				○								○	
6284 C				○						○			平城院寺・ 羅城門
6285 A				○			○	○					法輪寺・ 秋葉寺・ 唐招提寺
6307 B						○							
20(6308 A)				○					○	○			西隆寺・ 香山堂・ 平城京
6311 B									○	○			○
6311 D									○	○			
6313 A									○	○			○
6313 B									○	○			阿弥陀浄土 院
6313 C						○							
210(6663 A)						○				○			○
6663 E						○							
6664 C				○					○	○			
6664 F				○					○	○			法華寺
6664 H									○	○			平城京
6666 A									○				
221(6681 A)						○				○			
6685 B				○	○								阿弥陀浄土 院
227(6694 A)									○	○			唐招提寺・ 平城京

後者については、付表1に示すように平城宮所用瓦の割合が多い。たとえば軒丸瓦A型式(当遺跡での仮称)は、平城宮6311B型式と分類されているもので、平城宮での出土状況を試みると第1次大極殿(恭仁宮へ移築)地域の内、内裏地域での9.9%(6311Aも含めると24.1%)、内裏北方官衙地区で13%(同24%)を占めている。

また、軒平瓦A型式は、平城宮6663A型式と分類されているもので、平城宮の第1次大極殿地域ではまんべんなく出土している。たとえば、東面築地回廊Ⅲ区では、13.8%を占めている。すなわち、当該地で出土した軒瓦は、平城宮で一般的に使用された瓦といえる。

瓦の範は、寺院や官衙、邸宅それぞれに主体となるものがあって、別個の型式に属している。これを分析すれば、寺院系統やその他の系統の相違を知ることができる。

付表2は、『薬師寺』<sup>(注3)</sup>報告で紹介された薬師寺と南山城所在寺院出土の軒瓦の同范関係である。これに当該地の資料を付加した。一般的に、平城宮式の瓦は、平城宮のための瓦であって、他の施設に使用されることはないが、部分的に平城京や有力寺院、及び南山城所在寺院に限って使用された。したがって、この点から言えば、多彩陶器が示す遺跡の性格と合致する。しかし、

より細かく分析すれば、より限定した結果が得られる。

薬師寺は平城京造営開始と呼応して造営された官寺であるが、ここで出土する平城宮式の瓦で、南山城所在寺院でも出土するものは、すべて平城Ⅲ期以降である。そして、当遺跡の瓦と重複するものではなく、この点から言えば、南山城所在寺院と別系統であったといえる。当遺跡の主体的な瓦である軒丸瓦A型式は、薬師寺にはない。また、軒平瓦A型式は、薬師寺でも出土するが、量的には少ないという。現在のところ、当遺跡の主体となる瓦(軒丸瓦A・B型式、軒平瓦A型式)は、他でも出土するが、その主体とはならず、基本的には平城宮所用瓦と扱った方がよさそうである。

すなわち、当遺跡のA期、二彩瓦や平城宮式瓦、多彩陶器などを使用した時期は、平城宮と密接なつながりが認められ、たとえ、薬師寺のような官寺といえども主体的に使用されていないことから、当遺跡が寺であった可能性は極めて低い。したがって、平城宮と密接なつながりをもつ諸施設の中で、その候補を捜すべきであろう。

調査地の周囲に目を向けると、広い面積を占有できる場所はほとんどない。遺跡の広がり、地形の制約によって、南北40mの段丘面を越えるものではない。道一本隔てた北方の池部分(大正時代に造られた)を調査したが、古代の遺構はなかった。また、南に関しては、築垣が段丘南端でほぼ終息するようであり、更に南に延びていた可能性は極めて低い。このように南北を限定された幅狭い地では、少なくとも1町以上の方格地割が必要な、寺や国府、郡衙などはこの条件を満たさない。方各地割を必要とせず、平城宮と関係が深いのは離宮であろう。聖武天皇の松林宮も自由な平面形を採用しているのが示唆的である。

#### 4. まとめ

以上の考察の結果、少なくともA期については離宮と考えるのがもっとも可能性が高いこととなった。現在のところ、離宮を裏づける文献資料は皆無といっても良いが、ただひとつ、『続日本紀』天平宝字7(763)年10月の条に山背国に行幸(孝謙上皇か)した記事があり、この際、山背国介と、稲峰間連中村女が位を上げられている。稲峰間氏の居宅は精華町畑ノ前遺跡<sup>(注4)</sup>と言われており、調査地とは1.5kmしか離れていない。私は、この行幸の際に功績のあった稲峰間氏に授位したと考えており、行幸先が調査地であっても構わないと考えている。なぜなら、孝謙上皇を迎えるのに必要な施設が整っていたからである。

なお、寺院であったという説もある。足利健亮氏によって出されているが、この説の有力な根拠が、『興福寺官務牒疏』の記事である。それによると、かつて相楽郡山田郷朝日荘の地に山田寺があったという。中世でも僧房6宇を擁し、有力であったことが知られるが、承元3(1209)年に焼亡したらしい。しかしながら、今回、寺とすれば伽藍中心地の西

部を調査したことになるが、10世紀初めで断絶しており、焼亡の痕跡もなかったことから、記事とは合致しない。調査地の近辺にあったかもしれないが、少なくとも当該地ではない。

足利氏の論証によれば、山田という1～2kmの範囲に寺があった可能性は極めて高いが、それが、当該地であったという断定には結びつかない。

ともあれ、今回の調査は各方面からのアプローチが必要であり、まずはその叩き台を呈示して、この稿を終わりたい。

(いの・ちかとみ=当センター調査第2課調査第2係主任調査員)

注1 榎崎彰一 1990 『日本陶磁大系 三彩・緑釉・灰釉』 平凡社

注2 奈良国立文化財研究所 1982 『平城宮発掘調査報告X I』

注3 奈良国立文化財研究所 1987 『薬師寺発掘調査報告』

注4 財団法人古代学協会 1987 『京都府(仮称)精華ニュータウン予定地内遺跡発掘調査報告書』

※なお、調査中、いろいろな方にご教示いただいたにもかかわらず、この項ではほとんど生かされたいない。後日の概報で触れたい。ただし、瓦については奈良国立文化財研究所の毛利光俊彦氏からご教示いただいた。調査途中のことでもあり、瓦の同定については筆者の責任とする。

# 百濟の榮華

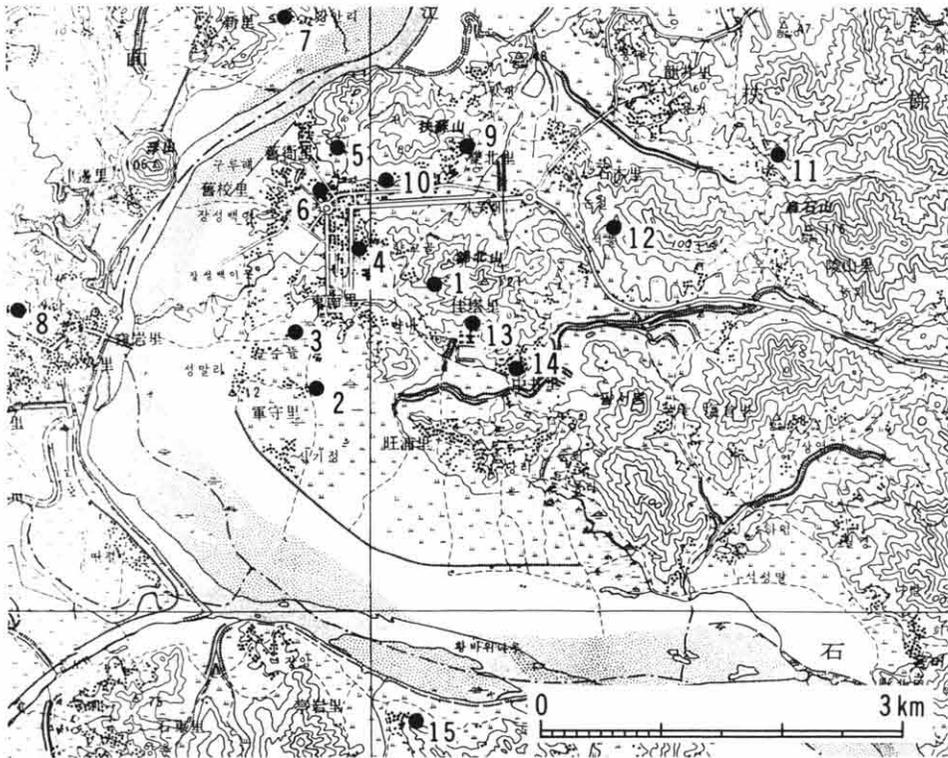
—韓国扶餘・伝天王寺跡試掘調査略報—

金 鍾 萬

## 1 調査の経緯

国立扶餘博物館では、1989年8月20日から10月10日までの約50日間にわたって、忠清南道扶餘郡扶餘邑東南里錦城山に所在する伝天王寺跡(附注1)の試掘調査を実施した。

本寺跡は、1944年、日本人によって初めて調査されたが今日までその報告書が刊行されず、恐らく、当時出土した「天王」銘丸瓦(附注2)をもって、漠然と天王寺跡として言い伝えられてきたが、この度、扶餘博物館の新築移転地に確定されるに伴い全面調査を行い、



第1図 扶餘地方の主な寺院跡等の分布配置図

- |         |         |           |           |           |
|---------|---------|-----------|-----------|-----------|
| 1.伝天王寺跡 | 2.軍守里廃寺 | 3.東南里廃寺   | 4.定林寺跡    | 5.扶蘇山廃寺   |
| 6.旧衙里廃寺 | 7.王興寺跡  | 8.外里廃寺    | 9.双北里廃寺   | 10.東山里廃寺  |
| 11.驚龍寺跡 | 12.観音寺跡 | 13.佳塔里北廃寺 | 19.佳塔里南廃寺 | 15.亭岩里瓦窯跡 |

既存の出土遺物との関連性などを究明し、伝天王寺跡の正確な位置・規模及び性格などを明らかにするとともに、博物館移転後には復元・整備し、観覧者のための野外展示として活用する計画で、まずは試掘調査を実施するに至った。

## II 位置及び環境

伝天王寺跡は、行政区域上、扶餘郡扶餘邑東南里 山16-1、同34-1・2、同35番地に位置する(第1図)。扶餘の市街地南側に聳える標高121mの錦城山<sup>(附註5)</sup>は、扶餘邑内の東側を包み込む山で、本遺跡は、この山の南麓中腹下方の平坦な台地上に位置し、総面積100余坪を占有している(第2図)。

本遺跡から北方へ約150m山道を登ると朝王寺があり、高麗時代中期以後の作品として知られる毘盧舎那仏坐像を安置している。西方からは扶餘市街地の南側が一望でき、近くには定林寺跡が位置している。一方、南側の宮南池東辺には花枝山が低く横たわり、隣接して宮南池・軍守里廃寺跡が並び、遠くには白馬江(錦江)が眺望できる。

## III 調査の概要

調査は、史跡(史跡指定53号)に指定された全体区域に、縦5m×横5mの方形グリッド



第2図 伝天王寺跡地形測量図(中央二重太線部が寺跡)

を設定し、さらに各グリッド内に幅1m×長さ4.4mのトレンチを2箇所設けて、遺構の残存状況を把握する作業から始めた。

対象地域の西側調査では、ほとんどすべてのトレンチから表土を除去するや直ちに混礫土層が現われ、部分的に瓦包含層が認められた。東側に調査が進むにつれ、瓦包含層が徐々に拡がり、その範囲は東北側平坦地にまで及び、ほぼ全面的に確認することができた。

調査地の東端部付近から発見された建物跡遺構は、表土下約30cmから発見されたが、上層基壇と考えられる石積みの外側直下に径41～43cmの円形礎石を上層基壇の線に沿って配置し、礎石の真心から北側、すなわち上層基壇の外郭から約110cm離れて丸瓦・平瓦で築造された瓦積基壇が発見され、この建物跡が重成基壇(附注6)からなっていることを確認するに至った。

### 1. 下層基壇(瓦積基壇)

混礫土層を「L」字形に掘削した後、赤褐色粘土を敷きつめて底面を平坦に整地し、この整地面上に瓦を幾重にも積み上げており、瓦相互の隙間は黄褐色粘土を充填させていた。

基壇の長さは、南北14.8m、東西17.8mである。北側部分の瓦積基壇中、特に良好な残存部では、14段を数え、高さは40～45cmを測り、東方に偏して埴片1点を共用していることも判明した。しかし、元来の瓦積みの段数は17～18段であった可能性が高い。

南側の瓦積基壇はすでに大部分が流失し、西南側の一部が1～2段残存していたにすぎなかった。この南側基壇では、後代に構築された側溝によって最下段の瓦のみが辛うじて原位置を保っていた個所もある。

一方、西側の瓦積基壇の段数は北側のそれより少ないが、瓦積基壇外面に瓦を斜立させて補強しており(図版(2)参照)、ほぼ完存に近い状態で



写真1 下層基壇瓦積細部状況(東側)

あった。この方法は北側と南側の瓦積基壇にも部分的に認められ、基壇を保護するためと推定される。しかし、瓦積基壇に用いられていた瓦と補強瓦とは叩き文様を異にしており、時期的な前後関係も考慮する必要性があろう。

瓦積基壇の上面には円形礎石を配列しており、北側と西側で計8個が確認された(図版(1)参照)。このうち北側基壇には7個の礎石が存するが、北東隅の1個が消失しており、北西隅の礎石が若干傾いている点(図版第(2)参照)を除けば、残りの6個は原位置を保持していた。

礎石の下部は貧弱で、底面が平坦で、裏込石用の混礫土に直接礎石を安置したものが大部分と考えられるが、北東隅の礎石抜取跡には自然石2個が食い込んでおり、礎石を置く際に礎石を水平に保つために支える、すなわち裏込石だと推定される。

東西に配列された各礎石間の距離は、両端2間が193cm、中央の3間は265cmで、計7間を数える。南北は、両端2間が193cm、中央間が490cmで、計5間である。これらの円形礎石は、支柱用に配されたものではなく、裳階用の礎石として使用されたものではないかと考えられる。定林寺跡<sup>(附註7)</sup>金堂跡、扶蘇山西腹寺跡<sup>(附註8)</sup>の金堂跡などが、本例と類似した構造であり、百濟建築の架構方法を究明する上で良好な資料となるものである。

## 2. 上層基壇

上層基壇は、厚さ約30cmの表土を除去するや直ちに検出され、東西15.3m・南北12mを測る。基壇上面は既述したように大部分が自然流失しており、南側底面は北側のそれよりも約15cm削平されていることが明らかになった。

基壇上面には数十個を数える円形のピットが発見されたが、これは最近銀杏の苗木を移植した折りに生じた穴が大部分であり、中央に位置する5個のピットは深く、径も大きく、さらに中心軸線が建物跡の方向とも一致することから、裏込用ピットと関連すると思われる。

上層基壇中央には東西に長い幅110cmの溝が構築されていた。この溝は、東側と南側の瓦積基壇を壊して掘削されており、重成基壇建物跡よりは後代に築造されている。溝の南側部分はほとんど平坦化し、下層基壇(瓦積基壇)との高低差は全くない。

上記した溝の北側中央部には南北220cm・東西35cm・深さ45cmの長方形の溝があり、その底面には「T」字形に深くさらに一本の溝が穿たれていた。

上層基壇の側面には長さ10cm位の自然石を立て、その内側を黒褐色粘土で充填していた。これは、上層基壇を形成する混礫土層先端部の磨耗を防ぐための補強と見られる。上層基壇の現高は礎石上面よりは高く、18cm位残っているが、下層基壇である瓦積基壇の高さを考慮する限り、現状よりは明らかに高かったと推定される。

### 3. その他の遺構

調査地の南側、瓦積基壇から2.2mの距離をおいて東西方向に延びる石積み遺構を一部確認した。この石積み遺構は残存状況は良くないが、建物跡と主軸が一致する。恐らくは瓦積基壇南辺前面に造られた階段か、または他の基壇の一部である可能性が高い。

この石積み遺構の前面には、深さ70cm・幅150cmをもって、混礫土層を「U」字形に掘削した後に、底面から約20cmの厚さで瓦・土器・自然石などを混入した粘土層があり、さらに黄褐色粘土を約30cm充填させ、その上面に瓦を1～2段敷きつめた遺構が発見された。この溝状遺構は、建物跡の東西辺に合せて南へ5度振って「L」字形に曲折して延びているが、建物跡中央部相当付近では確認されなかった。溝内からは、丸・平瓦、蓮華文軒丸瓦、器台片、鴟尾片などが検出された。すべて百済時代に属する。

一方、建物跡の東側、瓦積基壇の東端から3.3mの地点で、縦51cm、横50cmの方形礎石1個が確認されたが、他の建物跡と関連するかは不明である。

### IV 出土遺物

出土遺物は、建物跡からは皆無で、建物跡前面に構築された溝状遺構内から蓮華文軒丸瓦、器台片、鴟尾片などが若干採集されたにすぎない。

### V おわりに

扶餘地方で瓦を積み上げて構築された瓦積基壇は、軍守里(註9)廢寺の金堂・講堂跡、扶蘇山西麓廢寺の廻廊跡(註10)、定林寺の廻廊跡(註12)などで確認されているが、大部分が破壊・消失していた。しかし、今回調査された建物跡はほぼ完存しており、当時の使用尺問題など、古代建築研究に貴重な資料として、学術的・文化財的価値が至大なものと思料される。しかし、建物跡が寺院と特定できるだけの遺構や遺物が検出されなかったため即断はできないが、ある特殊な目的に使用された建物で(註13)あったと推量してよからう。

(金 鍾 萬=韓國・國立扶餘博物館學藝研究士)  
(訳・松井忠春=当センター調査第1課資料係主任調査員)

《訳者付記》 本報文は『博物館新聞』第220号(1989年12月1日発行)に掲載されたものである。本寺院跡は戦前調査さ



写真2 錦城山出土  
「天王」銘丸瓦  
(國立扶餘博物館蔵)

れたにも拘わらずその詳細は不明のままであったが、その概要が再調査により明確になった。この報文に接した記者は、飛鳥時代諸寺院に認められる瓦積基壇を考究する上で極めて重要な資料になるものと考え、原文の訳出を金鍾萬先生にお願いしたところ、快諾して頂き、写真や図面の送付も賜った。金先生に深謝するとともに、指導・助言等を頂いた韓國國立晋州博物館館長金誠龜先生と同國立扶餘博物館學藝士崔應天氏、ならびに高石市教育委員会神谷正弘氏に対し謝意を表します。

訳注1 通例は錦城山廢寺と呼称されている。

訳注2 藤沢一夫「古代寺院の遺構に見る韓日の関係」(『アジア文化』第8巻第2号、東京、1971)に百濟錦城山廢寺として、当時検出された基壇の全景と瓦積基壇東縁北部の写真二葉が掲載されている。

訳注3 この「天王」銘丸瓦は、韓國國立晋州博物館館長金誠龜先生によれば、高麗時代に属する。

訳注4 天王寺は一般には旧衙里廢寺跡と推定されているが、その根拠となす「天王」銘丸瓦は定林寺跡からも出土しており、特定できていない。

訳注5 錦城山は、第1図の錦北山を指す。

訳注6 原文では二層基壇となっているが、ここでは訳注2 藤沢論文に従って重成基壇とした。

訳注7 尹武炳『定林寺址發掘調査報告』(忠南大學校博物館・忠清南道廳編、大田、1981)。

訳注8 米田美代治「朝鮮上代に於ける建築計画の數學的一瞥見(其2)―數學の応用發達と尺度に就いて―」(『朝鮮と建築』第19輯11号、京城、1940)。

古代を考える會編『古代の日本と朝鮮 I』(『古代を考える』5、羽曳野、1976)。

徐聲勳「扶蘇山西腹寺址」(円光大學校馬韓・百濟文化研究所編『百濟文化研究』諸問題』禮里、1981)。

張慶浩『百濟寺刹建築』(ソウル、1991)。

訳注9 石田茂作「扶餘軍守里廢寺址發掘調査概要」(朝鮮古蹟研究會編『昭和11年度古蹟調査報告』京城、1937)。

訳注10 扶蘇山西麓廢寺は、扶蘇山廢寺あるいは扶蘇山西腹寺とも呼称されている。

訳注11 訳注8に同じ。

訳注12 訳注7に同じ。

訳注13 このような寺院の性格について、洪思俊氏は「山地伽藍は王宮家から祈願することのみを目的として建てられた」と考え、北野耕平氏は「小堂宇は扶余存住の貴族等によって私的に發願建立された仏寺で、平地の伽藍に対して仏庵的な修行道場ではなかったか」と推定される。洪思俊「弥勒寺址考」(円光大學校馬韓・百濟文化研究所編『馬韓・百濟文化』創刊號、禮里、1975)。  
北野耕平「百濟時代寺院址の分布と立地」(田村圓澄・黄寿永編『百濟文化と飛鳥文化』東京、1978)。

## 平成3年度発掘調査略報

## 4. こくばら野遺跡

所在地 熊野郡久美浜町字甲山小字古君原野

調査期間 平成3年5月14日～8月30日

調査面積 約700㎡

はじめに こくばら野遺跡は、久美浜湾に望む標高11m前後の海岸段丘上に位置する。付近には長良遺跡、日光寺遺跡、浦明遺跡などの集落遺跡が段丘上に点々と分布しており、当遺跡でも昨年度の試掘調査で飛鳥時代～奈良時代の集落跡を検出している。

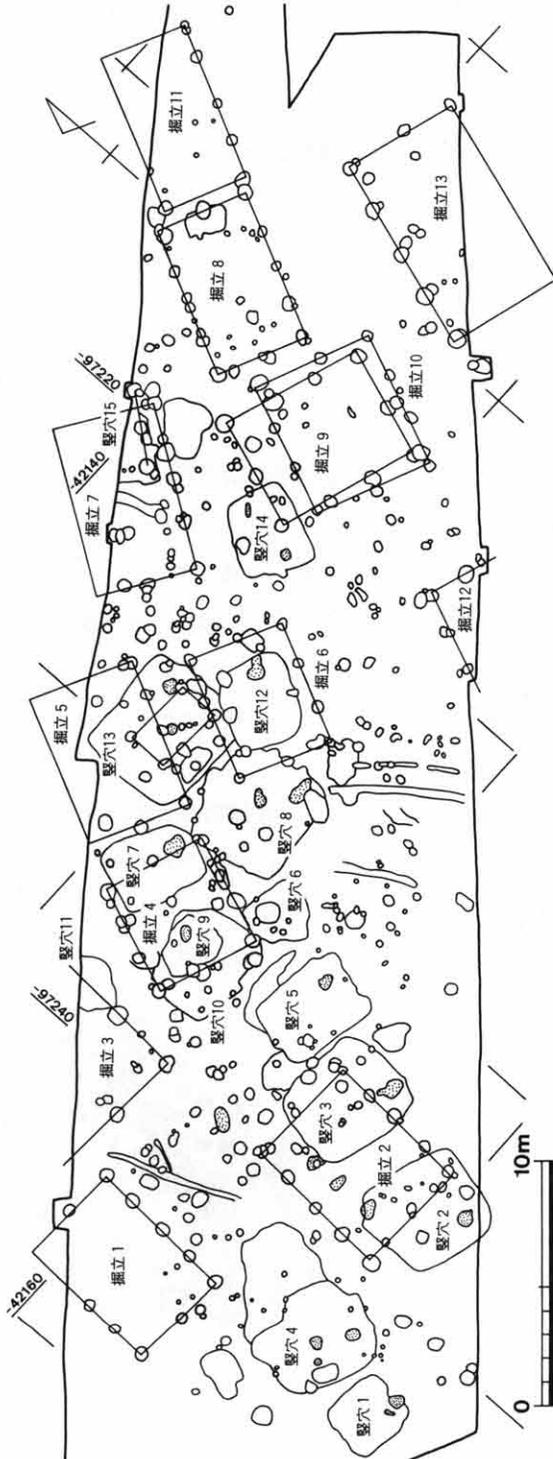
調査概要 今年度はD地区、E地区、F地区の3か所を調査した結果、昨年度に調査したA地区の北東側にあたるD地区で最も顕著な遺構を検出した。A地区については、『京都府埋蔵文化財情報』第39号に略報を掲載したが、A・D地区で検出されたものは一連の遺構群であるので、改めて両地区について簡単に報告する。

D地区で検出された主な遺構は、竪穴式住居跡4基、掘立柱建物跡9棟以上、及び土坑・溝などである。A地区と合わせると竪穴式住居跡15基、掘立柱建物跡13棟以上を検出したことになる。竪穴式住居跡は、A地区の南隅から北東方向に向かって幅約10mの帯状の範囲にのみ分布していることが判明し、集落の景観を復原し得る貴重な資料となった。また、住居の分布に何らかの規制が行われていたことを窺うこともできる。これらの住居跡の年代は7世紀後半から8世紀初頭頃である。掘立柱建物跡群は、竪穴式住居跡に比べて広い範囲に分布しており、主軸方向の違いによって大きく掘立1～3、掘立4～13の2群に分けることができ、後者はさらにいくつかの群に分かれるものと思われる。これらの掘立柱建物跡の時期は、おおむね8世紀前半のうちにおさまるものと考えられるが、各群ごとの詳細な時期差などは今後の検討課題である。掘立柱



第1図 調査地周辺遺跡分布図(1/50,000)

- 1.こくばら野遺跡 2.雲晴遺跡 3.浦明遺跡  
4.日光寺遺跡 5.長良遺跡



第2図 A地区・D地区遺構平面図

建物跡の柱穴に、竪穴式住居跡の埋土を掘り込んでいるものがあることや、竪穴式住居跡と掘立柱建物跡の分布の状況などからみて、両者は共存しないものと見られる。しかし、両者の時期差はわずかであり、連続して営まれた集落の住居の形式が竪穴式住居から掘立柱建物に変化したと考えている。

まとめ この遺跡の調査では、7世紀後半から8世紀前半の集落跡が発見され、この地域の集落における竪穴式住居から掘立柱建物への住居形式の変化の一端を窺うことができたほか、集落の構造を考えるうえでも貴重な資料を得ることができた。また、当遺跡の集落は、すでに調査された長良遺跡、日光寺遺跡等で発見された8世紀代の集落とともに、丹後国熊野郡田村郷を構成する集落のひとつであると思われる、集落相互の関係、集落成立及び、住居形式の変化の背景等、律令制成立期の集落の実態を解明するうえで貴重な資料となるものである。

(森島康雄)

## 5. 堤谷古墳群

所在地 熊野郡久美浜町字丸山小字堤谷ほか  
 調査期間 平成3年5月9日～9月18日  
 調査面積 約1,100m<sup>2</sup>

はじめに 今回の調査は、農林水産省近畿農政局丹後開拓事業所が計画推進する丹後国営農地開発事業の永留6団地造成に伴って、同局の依頼を受けて実施したものである。古墳群は、佐濃谷川中流域左岸の、丸山集落の背後にある低丘陵上に位置する。本古墳群では、1988年に第1次調査を行い、3基の古墳を確認している。今回行った調査の結果、丘陵上に6基の古墳が連珠状に連なって築かれていたことが判明し、前回調査と合わせると、9基の古墳を確認したこととなる。

調査概要 今回調査を行った地点では、6基の古墳と、これに伴う12基の埋葬施設を検出した。埋葬施設は、木棺直葬墓と土壙墓が混在しており、11号墳では土師器壺を使用した土器棺墓も1基確認した。墓壙上には供献土器を置くものがあり、これらの土器から見て古墳群の造営時期は5世紀初頭から後半にかけてのものであると考えられる。

(森 正)



調査地位位置図  
 1.堤谷古墳群 2.野中城跡



調査地地形測量図

## 6. 野 中 城 跡

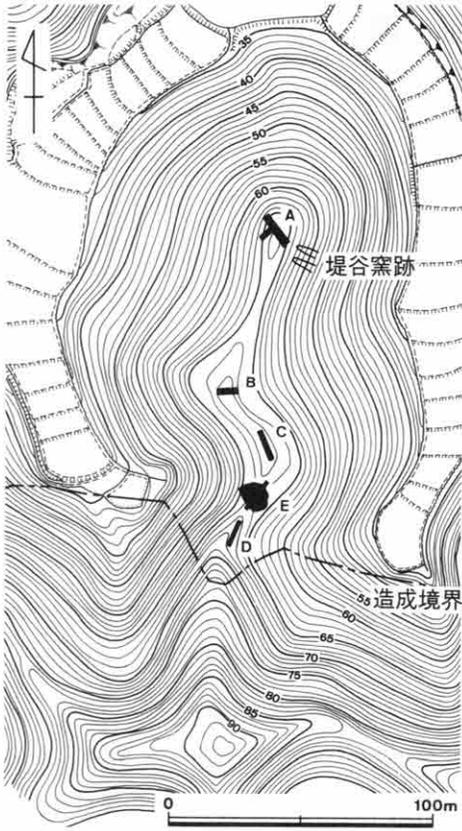
所在地 熊野郡久美浜町字丸山ほか  
調査期間 平成3年8月28日～9月12日  
調査面積 約130m<sup>2</sup>

はじめに 今回の調査は、農林水産省近畿農政局丹後開拓事業所が計画推進する、丹後国営農地開発事業の永留6団地造成に伴い、同局の依頼を受けて実施したものである。調査を行った地点は、野中城本郭から北に向かつてのびる支丘陵の先端部分にあたり、堀切が確認されていた。堀切より先端の部分についても、山城に関連する何らかの施設の存在が予想されたため、4か所に試掘トレンチを設定したが、いずれも遺構・遺物ともに認められなかった。

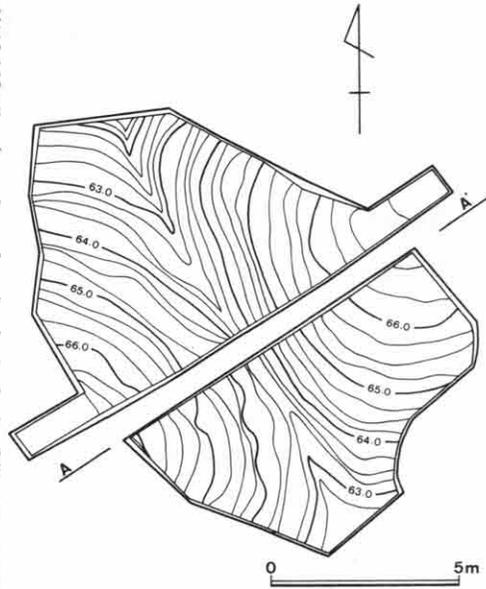
調査概要 今回確認した堀切は、本郭へ取り付く丘陵を分断するものであり、比較的規模の大きなものである。幅約10m・最深部での深さ約3mを測り、断面形は、上部では傾斜が緩く、下方ほど傾斜がきつい「V」字形を呈する。出土遺物としては、底面付近から中世陶器片が1点出土しており、山城の時期を示すものと考えられるが、細片であり、時期を特定することができない。(森 正)



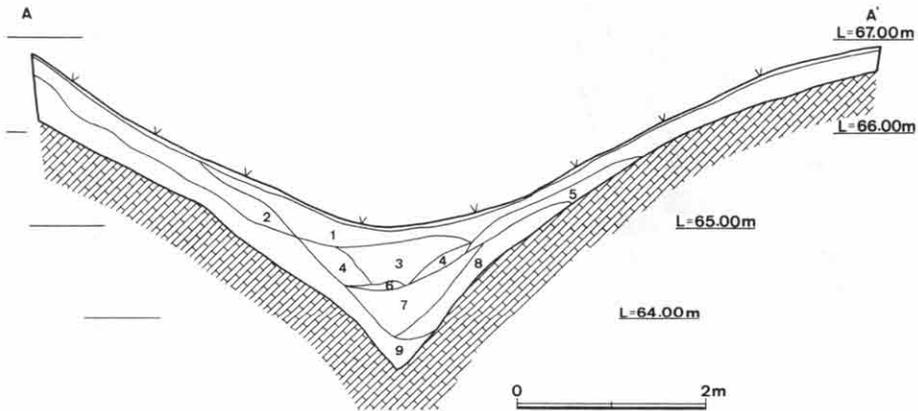
堀切の状況(東から)



第1図 調査地位置図



第2図 堀切平面図



第3図 堀切土層断面図

## 7. 薬師遺跡

所在地 中郡大宮町字奥大野  
 調査期間 平成3年8月20日～10月9日  
 調査面積 約450m<sup>2</sup>

はじめに 薬師遺跡は常吉川流域の洪積世の段丘上に位置する。調査前に分布調査が行われており、わずかながら弥生土器や土師器等の散布が確認されている。今回の発掘調査は京都府丹後土地改良事務所の依頼を受け、大宮地区府営ほ場整備事業に伴って実施したものである。

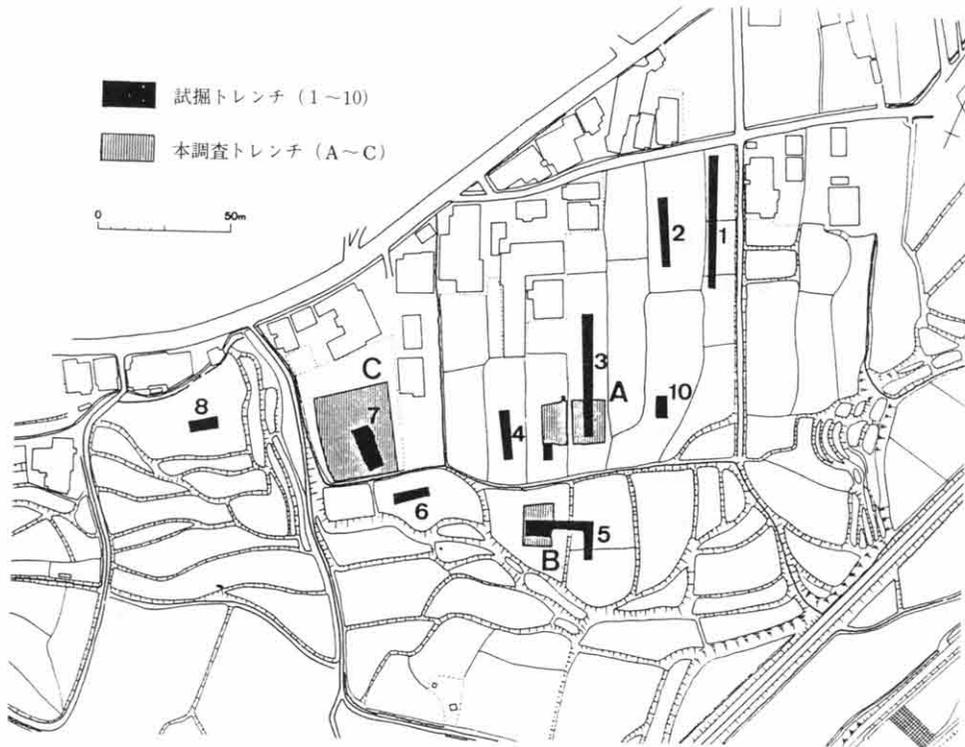
調査は、京都府教育委員会がまず試掘調査を行った(試掘トレンチ1～10)。その結果、背後の丘陵に近い地区で弥生時代～古墳時代の溝を検出した。一方、段丘の中央部では平安時代末頃の柱穴群を確認した。以上の結果をうけて、当調査研究センターが本調査を行った。調査は、段丘中央部の比較的遺構の残りのよい地区3か所(試掘トレンチ3・5・7)を、拡張することにより調査区を設定した(本調査トレンチA・B・C)。

調査概要 今回検出した主な遺構は、弥生時代中期～後期の溝・奈良時代後半の溝・平安時代後期の掘立柱建物跡2棟である。Aトレンチからは2間×3間の掘立柱建物跡を検出した。この建物跡の大きさは約5.7m×7.0m(東西×南北)で、柱掘形はすべて円形で直径



第1図 調査地位置図(1/50,000)

約30cmくらいのもが多い。Bトレンチからも柱掘形をいくらか検出した。しかし、建物には復原できなかった。Cトレンチでは、溝2条と掘立柱建物跡を1棟検出した。掘立柱建物跡は3間×3間で、約9.0m×7.8m(東西×南北)の大きさをもつ。柱間距離は東西約9尺×南北約10尺で、柱穴からは黑色土器や土師器の椀が出土している。弥生時代中期後半～後期初頭の溝は丘陵に近いところで検出された。溝の断面は「V」字状に近い形態で、幅約1.6m・深さ約50cm・検出長は約15mを測る。一方奈良時代後半の溝は、段丘の中央部を蛇行しながら流れていたようである。底面は凹凸に富み、幅約1.3m・深さ約



第2図 トレンチ配置図

20cm・検出長は約24mを測る。

まとめ 今回の調査では奈良時代後半～平安時代の遺構をわずかではあるが、まとまった形で検出することができた。このほぼ同時代の集落として、薬師遺跡の約1kmほど上流には、地方官衛的性格の強い正垣遺跡が存在する。今後の検討課題として、両遺跡の関連性を考える必要がある。

(岸岡貴英)

## 8. 下畑遺跡第6次

所在地 与謝郡野田川町字三河内810  
調査期間 平成3年6月10日～8月3日  
調査面積 約500m<sup>2</sup>

はじめに 今回の発掘調査は京都府立加悦谷高等学校の体育館建設に伴い、京都府教育委員会の依頼を受け、当調査研究センターが実施したものである。

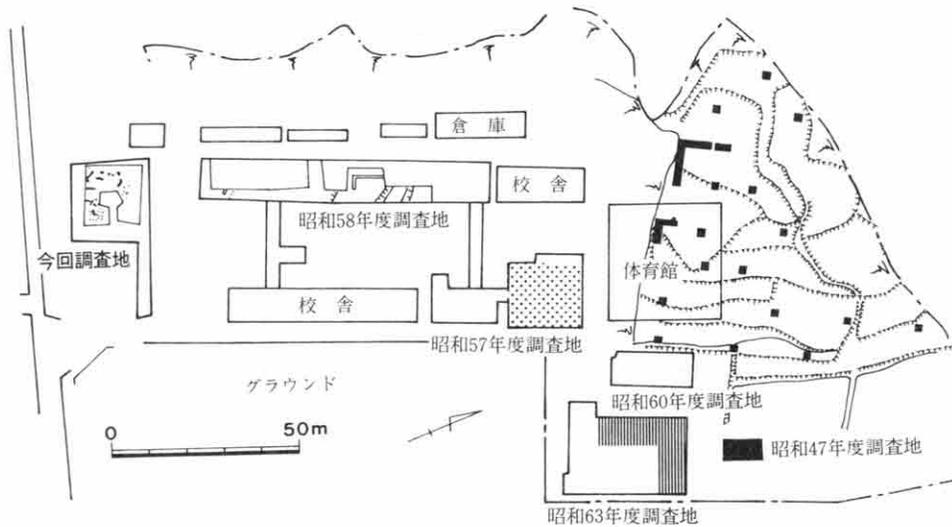
下畑遺跡は、野田川が形成する沖積平野に向かってのびる、低い丘陵の麓に位置する。この遺跡は昭和47年に調査が行われて以降、計5回にわたる発掘調査が行われた。昭和57年度の調査では、鎌倉時代の木枠組の井戸1基を検出し、井戸枠及び井戸掘形部分から多量の土器や木製品等が出土している。また昭和60年度の調査では、弥生時代中期後半の溝2条と、埋葬主体1基を検出している。以上の結果から、下畑遺跡は弥生時代と鎌倉時代を中心とする複合集落遺跡と考えられている。

今回の調査地はこれまででもっとも西側に位置する。調査地の周囲には、すぐ北側に丘陵が迫り、それ以外の三方向は道路や家屋をはさんで水田が広がる。一方地元の方々の話によれば、この調査地付近は加悦谷高校が建設される以前は、かなり水はけの悪い水田であったらしい。



第1図 調査地位置図(1/50,000)

調査概要 調査はまず調査対象地の隅を「L」字形に重機で掘削し、約20cmの奈良時代～鎌倉時代の包含層を確認した。その結果、調査対象地の東側半分を拡張したが、遺構として確認したのは数条の溝と若干のピットのみであった。その後約2.5mほど掘削したが、良好な包含層は確認すること



第2図 トレンチ配置図

ができず、調査を終了した。

まとめ 今回の調査では、弥生時代と奈良～鎌倉時代の遺物が出土するものの、顕著な遺構を確認することはできなかった。下畑遺跡の弥生時代や鎌倉時代の集落は、より丘陵に近い部分に広がっていたと考えるのが妥当と思われる。

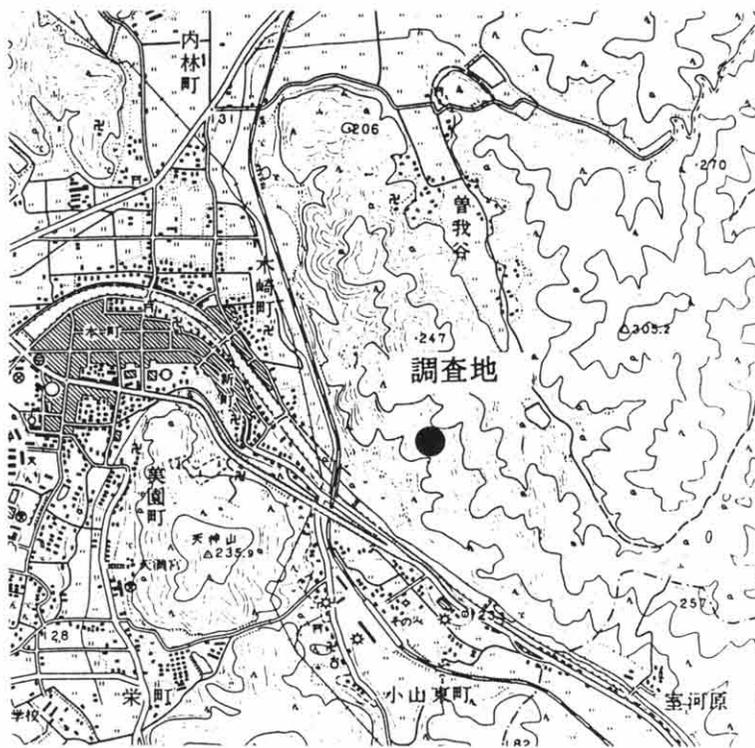
(岸岡貴英)

## 9. 川向北1号墳・川向北遺跡

所在地 船井郡園部町小山東町  
調査期間 平成3年5月7日～8月9日  
調査面積 約300m<sup>2</sup>

はじめに 川向北古墳群は園部川の左岸の丘陵上に位置し、対岸には園部天神山古墳群が所在する。古墳群は3基の円墳からなり、その中で尾根先端部を占める1号墳は径約13mを測る円墳である。今回の調査は国道9号バイパスの建設に伴い、建設省近畿地方建設局の依頼を受けて実施した。

調査概要 調査は石室と思われる窪み部分に十字のトレンチを設定し、掘削を開始した。表土剥ぎの段階で墳丘部分には列石と思われる人頭大の礫を確認した。墳丘南側の列石は石垣状を呈しており、残存の良好な部分では、3段に積まれていることが確認できた。墳



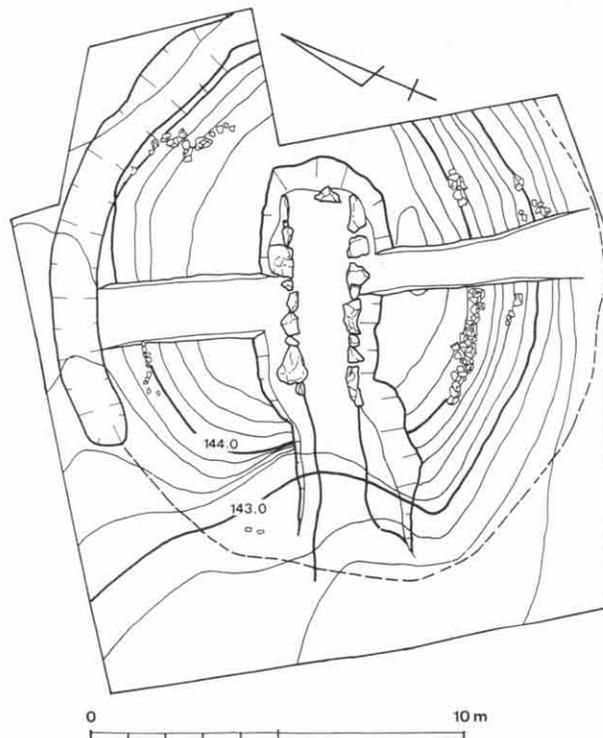
第1図 調査地位置図(1/25,000)

丘全体の列石の状況は、墳頂部が石の採掘によって大きく窪んでいるため、築造当時のようすは窺えないが、北側は墳丘裾寄りに1列、南側は墳頂部と墳丘裾部分に列石が残存していた。これらの列石は墳丘の断面観察から、一部分は墳丘表面に露出していたようで

あるが、大半は盛土中に埋もれており、盛土流失を防ぐための施設と考えられる。一方、石室は、基底部の石は奥壁部分の1石を除き、ほとんどが良好に残っていた。石室の形態は奥壁より見て左側に袖の付く片袖式石室である。石室は羨門部までが石で構築されており、その外側の墓道にあたる部分は盛土により壁面が造られている。墓道は羨門部から末広がりになり墳丘裾へと広がる浅い溝状を呈した落ち込みであり、埋土中で須恵器の大甕が出土した。石室の規模は玄室長2.7m、玄門幅1.6m(奥壁部分)~1.3m(玄門部)、羨道長2.9m、墓道長3.8mを測る。

石室に使用されている石材は、砂岩系とチャートとからなり、大きさも形も様々である。側壁の石は一部二段が残存しているが、その状況から持ち送り状になっていたことが窺える。石室の床面は大人の拳大の角礫を用いて礫敷としているが、奥壁から見て右側部分は人頭大の平石6個をほぼ上面の高さをそろえて据えており、棺台と思われる。羨道部分には閉塞石の残骸と思われる石が見られ、この石の間には須恵器が混入していた。出土遺物には左側壁と袖石の角部分を中心に出土した須恵器・土師器がある。須恵器には杯身・杯蓋・壺・高杯・提瓶などがあるが、特に壺と提瓶は口縁を上にして副葬時におかれた状態を保っていた。また、土師器は高杯2個体と小型丸底壺1個体がまとまっていた。土師器

は須恵器をすべて取り上げた下から出土しており、おそらくこの石室の初葬時に副葬された土器と思われる。これとは別に奥壁と右側壁の角部分からも小型丸底壺が出土している。このように角を意識した部分に置かれていることから何らかの祭祀的な意味合いをもっている可能性もある。その他の出土遺物には鉄鎌・刀子・碧玉製管玉がある。しかし土器と比較して出土位



第2図 調査後墳丘測量図

置に明確なまとまりは見られない。

墳丘の構築は地山成形したのち、石材据え付けのための墓壇の掘り込みを行い、裏込めをしながら第1次墳丘を築く。これらの作業を繰り返しながら石室及び墳丘を築造したと思われる。

また、墓道の落ち込みの肩部分に「L」字形に屈曲する溝状遺構を検出したため、下層遺構の確認のために墳丘羨道寄り半分を除去した。その結果、墳丘裾及び盛土の下から弥生時代後期の遺構を検出した。これらの遺構は川向北遺跡とした。

検出遺構は、竪穴式住居跡1棟、土坑、溝等である。竪穴式住居跡は約5m×6mの隅丸方形を呈し、北東辺を拡張している。周壁溝は幅20～30cm・深さ約10cmを測る。支柱穴は径約30cm、深さは10～20cmと比較的浅い。この住居跡に伴う炉跡は確認できなかった。出土遺物は周壁溝北隅で見つかった高杯が1点ある。土坑1は長軸1.4m・短軸0.8mを測る不整円形を呈している。この土坑からタタキ目の入った甕が2個体分出土した。この他、遺構に伴わない遺物として墳丘盛土中、あるいは旧表土内に含まれていた弥生土器片・打製石鏃・石庖丁・磨製石器片・砥石・銅鏃などがある。出土土器は遺構の数の割に数量が比較的多い。これは墳丘構築のために遺構が削平されたためと思われる。

まとめ この古墳は平坦な尾根筋を利用し、墳丘はほとんどを盛土によっている。立地は園部川を挟んで天神山古墳群と対峙する位置にあり、築造時期も6世紀末に比定され、この時期の地域社会を知る上で貴重な資料の1つになった。また、古墳の築かれる以前には弥生時代後期の集落が営まれた可能性があるが、今回の調査では遺構の広がり確認できなかった。しかし、遺物の出土量から見てこの尾根上に集落の存在が考えられる。

(柴 暁彦)

## 10. 鹿谷遺跡

所在地 亀岡市葎田野町鹿谷

調査期間 平成3年7月23日～10月15日

調査面積 約1,000㎡

はじめに 今回の調査は、京都府亀岡土地改良事務所の依頼を受け、府営公害防除特別土地改良事業に伴い実施した。鹿谷遺跡は、亀岡盆地北西部の行者山南麓にあり、遺跡はこの山から流れる砂川の堆積作用で形成された扇状地のほぼ全域(東西700m×南北750m)に及ぶ。これまで遺物散布地として知られていたが、具体的な様相はわからなかった。

調査概要 発掘調査は、京都府教育委員会と当調査研究センターが合同で行った。まず、京都府教育委員会が試掘調査を行い、遺構の有無を確認したのち、遺構の集中したところを中心に当調査研究センターが面的調査を実施した。

面的調査は、調査区を4つに分けて行った。1区では、掘立柱建物跡2棟、中世素掘り溝、土坑等を検出した。S B01は、桁行3間(5.3m)×梁間2間(4m)の南北棟の掘立柱建物跡である。S B02は東西1間(1.4m)以上×南北2間(3m)の規模を持つ。柱穴は円形で、直径約20cmを測る。中から瓦器片が出土したことから、鎌倉時代と考えられる。2区では、竪穴式住居跡1基・掘立柱建物跡1棟・溝などを検出した。掘立柱建物跡S B03は、桁行3間(4.6m)×梁間2間(3.4m)の規模をもつ。柱穴は円形で、直径約40cmを測る。竪穴式住居跡S H06は、一辺4.4mを測る隅丸方形を呈する。北辺部に焼土が広がり、ここから古墳時代の甕片が出土した。溝I2は幅約30cm・深さ約10cmを測る。構内から瓦器や土師器小片が出土した。3区では、竪穴式住居跡2基・掘立柱建物跡1棟・土坑等を検出した。竪穴式住居跡S H07は調査地の隅で確認したため、大きさ等は不明である。S H08は北辺で一辺5.4mを測る。北側にカマドの痕跡があり、土師器甕が出土した。掘立柱建物跡S B04は、桁行2間(4.3m)以上×梁間1間(2.8m)である。柱穴から遺物等が確認されていないため、時期等は不明である。4区では竪穴式住居跡3基・掘立柱建物跡



第1図 調査地位置図(1/50,000  
京都西北部)

1棟・溝などを確認した。SH09は南側で4.1mを測り、形は隅丸方形である。SH10は、北側で3.6m、西側で4.9mを測る。住居跡内から奈良時代の須恵器すり鉢・甕等が出土した。SH11は、一辺約4mを測り、形は隅丸方形である。ここでは土師器甕が出土した。掘立柱建物跡SB05は、桁行3間(4.8m)以上×梁間2間(3.3m)の規模をもつ。柱穴は一辺約60cmの隅丸方形で、深さ約20cmを測る。柱穴から遺物等は確認されていない。

まとめ 今回の調査では、竪穴式住居跡・掘立柱建物跡をはじめ、多くの遺構を確認した。時期的には、古墳時代から鎌倉時代にわたるが、縄文時代の打製石鏃なども確認されているので、遺構はさらに周辺に広がっていると思われる。(鶴島三壽)



第2図 検出遺構実測図

## 11. 燈籠寺遺跡(内田山A-3号墳)

所在地 相楽郡木津町大字燈籠寺小字内田山  
 調査期間 平成3年6月3日～7月15日  
 調査面積 約230m<sup>2</sup>

はじめに 今回の調査は、京都府立木津高等学校の埋設管敷設工事に先立って、京都府教育委員会の依頼を受けて実施した。今回の調査トレンチは、昭和59年度に西辺と南辺周濠の一部が検出された内田山A-3号墳の中心部にあたり、調査はその規模や主体部の構造を明らかにすることを目的とした。

調査の結果、内田山A-3号墳の大きさが解明できた。また、弥生時代の土坑、奈良時代の土坑、柱穴等も検出した。

**調査概要** 内田山A-3号墳の北側の濠SD01と南側の濠SD02を検出した。墳丘部の削平が著しく主体部は検出できなかった。SD01は現代攪乱のため、明瞭な平面形態を確認できないものの溝幅は約2mである。周濠本来の層は失われているが、須恵器、埴輪等があった。SD02は、幅2.8～3m・深さ0.6mを測る。溝内の堆積層は大きく3層に分かれ、上層では奈良時代の須恵器、中層では埴輪、土馬が出土した。SD01とSD02の溝心々間は16～17mを測る。出土した埴輪は5世紀前半に属し、その種類は円筒埴輪、朝顔形埴輪である。

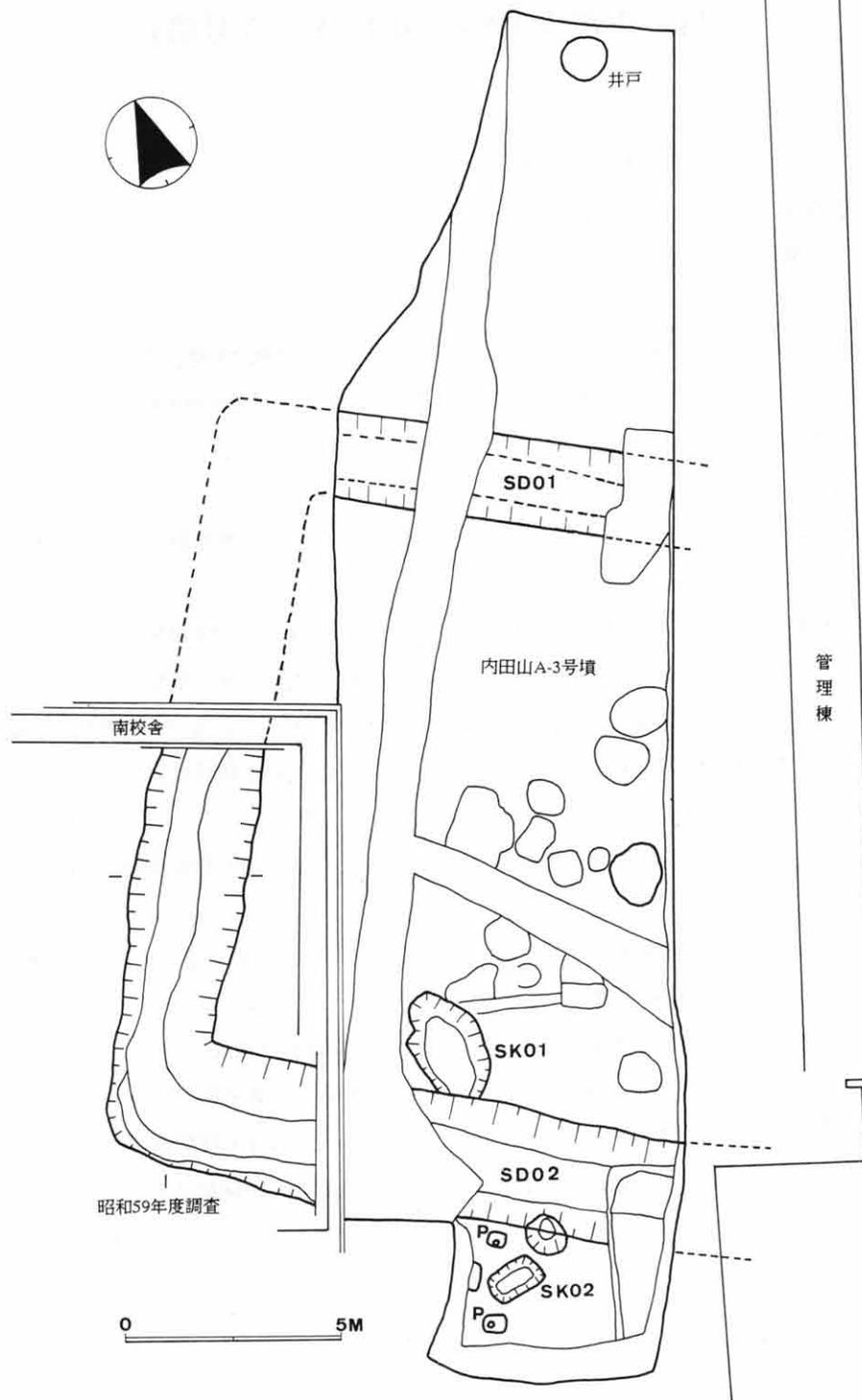
土坑SK01は、南周濠(SD02)で一部欠損しているが長楕円形を呈している。長軸2.8m・短軸1.5m・深さ0.3mを測る。堆積土は主に暗褐色土であり、焼土・炭化物・腐植土が混在する。出土遺物は、弥生土器甕の細片ほか石製品(敲石)もある。

土坑SK02は、長辺1.2m・短辺0.8m・深さ0.15mを測り、隅丸長方形を呈している。堆積土は灰褐色砂質土でSD02の上層に似ている。出土遺物はなく時期は不明である。

まとめ 内田山A-3号墳は一辺16mほどの方墳であることが確認できた。また、古墳の築造時期が5世紀前半で、濠が最終的に埋まったのが奈良時代であることが再確認できた。

SK01が弥生時代の土壙墓とすれば、前年度調査の方形周溝墓と考え合わせ、墓域の広がりを知る上で貴重な資料である。

(竹井治雄)



遺構実測図

## 中国陝西歴史博物館の開館

磯野 浩光

### 1

1991年6月17日(月)から同年6月23日(日)の7日間、「京都府文化交流友好代表团」の一員として、中華人民共和国陝西歴史博物館(陝西省西安市)の開館式典及び同国文物事情視察のために西安、北京、上海を歴訪することができたので、以下その概要を報告したい。

なおこの代表团は、陝西省文物局、同外事弁公室の招請をうけて組織され、門脇禎二京都府立大学学長を団長に、片岡肇(京都文化博物館)、太田信之(京都府立山城郷土資料館)、小中富雄(京都府総合府民部国際課)、中谷雅治(当調査研究センター)、磯野浩光(同)の6名で構成されたものである。

### 2

まずはじめに、日を追って代表団の概略日程を列記する。

- 6月17日(月) 大阪空港発、空路上海到着、豫園等を見学。
- 6月18日(火) 外灘、上海博物館、玉仏寺等を見学。空路西安到着。
- 6月19日(水) 華清池・唐華清宮御湯遺址博物館、秦兵馬俑博物館、秦始皇帝驪山陵、唐大明宮麟德殿址・同資料館、鐘樓、大慈恩寺(大雁塔)等を見学。  
門脇団長・太田団員は、別に西安外国語学院を表敬訪問。  
陝西省文物局主催歓迎宴に出席。
- 6月20日(木) 陝西歴史博物館開館記念式典、同開館記念の国際学術座談会に出席。  
陝西省姜信真副省長を表敬訪問、同副省長主催歓迎宴に出席。
- 6月21日(金) 法門寺、同博物館等を見学。京都府主催答礼宴を開催。
- 6月22日(土) 空路北京到着。万里長城(八達嶺)、明の十三陵のうち定陵等を見学。
- 6月23日(日) 天安門広場、故宮等を見学。空路大阪空港到着。

この日程は、陝西省文物局、同外事弁公室の皆さんの御尽力によって、おおむね予定どおりであったが、18日の西安到着が、飛行機の都合で、約3時間遅れたために、その日に予定されていた陝西省副省長への表敬訪問と同副省長主催歓迎宴が20日に延期された。

次に、この訪中の視察の目的であった陝西歴史博物館と法門寺を、簡単に紹介するとともに、感想を述べてみたい。

まず、陝西歴史博物館(第1図)は、西安市の中心部、城壁の南、大慈恩寺(大雁塔)の西北に、故周恩来総理の意志を受け継いで、4年の歳月と、約1.5億元の費用をかけて建設された国立の博物館である。敷地面積7万 $m^2$ 、建築面積5.6万 $m^2$ 、展示面積1.1万 $m^2$ 、収蔵品約11万点という巨大な博物館で、外観は唐代の宮殿建築を彷彿させる左右対称の2階建の大建築である。展示は、開館当時、本館1階・2階が基本陳列(常設展示)の「陝西古代史陳列」(1階-史前~秦代の通史的展示、2階-漢~清の通史的展示)で、同じく本館1階に臨時展覽(特別展示)が催されていた。この特別展示に相当するものが、「唐墓壁画真品展覽」と「昭陵文物精品展覽」で、「唐墓壁画真品展覽」は、永泰公主(李仙恵)、章懐太子(李賢)、懿徳太子(李重潤)、李寿、韋洞など唐代の準皇帝陵墓と言うべき有名な陵墓の壁画39枚(実物)をはぎ取り、剥落止めなど保存処理を施して、展示した圧巻である。これらの壁画は従来、陝西省博物館(碑林)で保存されていたものであるが、このように一堂に集めて公開されることは初めてであり、有名な壁画の数々をまのあたりに見学することができ、感激も一入であった。さらに、新博物館の地下収蔵庫には、一定の室温・湿度のもとで、数多くの実物壁画が、修復・保存処理を施されて保存されているとのことであった。また、「昭陵文物精品展覽」は、唐の太宗李世民墓の陪葬墓の副葬品などの展示で、程知節墓や尉遲敬徳墓の墓誌、俑、門扇など極めて貴重な文物を見学できた。

陝西歴史博物館の組織は、館長(開館当時空席)、副館長(尹盛平主席副館長)以下、陳列



第1図 陝西歴史博物館全景(『陝西画報』1991年第3期から転写)

資料部、保衛部、  
文物複製工廠、  
服務部、行政弁  
公室の11部署で  
構成されており、約400名の  
職員(正規職員  
約240名・臨時  
職員約110名・  
警備関係職員約  
50名)が勤務し

ている。また、コンピュータを用いて収蔵遺物と図書の管理も行われており、従来の陝西省文物管理委員会に所属していた調査研究機関のいくつか(たとえば、文物保護技術センターなど)も、この新博物館の構内に移転されており、陝西省における文物の調査、研究、展示の総合施設になるよう意図されているとのことである。

また開館記念式典は、中国国家要人の参列、祝辞、博物館前でのアトラクション、西安市内各地に張り出された開館を祝う真赤な横断幕など、国家的な行事として催され、我々代表団もきわめて丁重な待遇を受け、おおいに恐縮したものである。

さらに、興味深かったのが、開館記念式典当日の午後に、新博物館の「学術報告庁」で行われた「開館典礼座談会」(開館記念の国際学術座談会・第2図)であった。これは、開館記念式典に参列した、中国各地の省立博物館の館長、副館長をはじめ、大韓民国、ドイツ、ベルギー、カナダ、日本などの研究者、博物館、文化財関係者などが、一堂に会して、新博物館の展示方法、展示内容、管理運営についてかなり深い内容の討論を、約2時間半にわたって行ったものである。特に議論が集中したのは、新博物館の目玉である唐代陵墓の実物壁画の保存や展示品の管理、展示方法などの問題であった。最前列中央の主賓席を与えられた、我々代表団の門脇団長も、展示文物の国際性、実物壁画展示のすばらしさ、自国の出土遺物によって自国の新しい歴史像を再構成した展示方針への称賛などについて発言された。

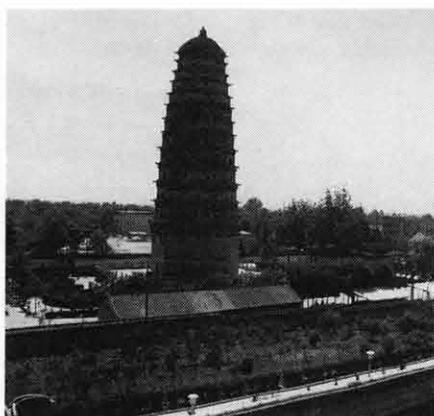
次に法門寺は、西安市の西方約100kmの宝鶏市扶風県に位置する寺院である。創建は、



第2図 「開館典礼座談会」



第3図 法門寺博物館



第4図 再建された法門寺の宝塔

後漢代の2世紀と伝えられ、実物の仏舎利が収められた四大名刹の一つとして有名であった。1981年8月、長雨のため明代に再建された八角十三重の宝塔が倒壊し、復元再建に先立って、1987年2月から11月にわたって発掘調査が実施され、塔の基壇下から、唐代の咸通15年(874)以前に修造された地宮(地下宝物庫)が検出された。この地下宝物庫から、唐代皇室の献納品である金銀器、陶器、ガラス製品、絹織物、貨幣、石造物

など600余点の遺物が発見され、唐代研究に寄与する一大発見として話題を集めた。実物とみられる仏舎利も8重の金銀器の中に収められており、中国国内で現存唯一のものとして大いに注目され、法門寺のシンボルとなった。これら地下宝物庫の埋納品は、数量も多く、貴重なものばかりで、保存状態も完全であり、唐代の政治、文化、宗教及び中国と西アジアの対外交流を考える上でも極めて貴重な資料である。これらの出土品の約20分の1は、展示に堪えうる保存状態にあるところから、1988年11月に新築された法門寺博物館(第3図)に陳列されており、つぶさに見学することができた。また、再建された宝塔(真身宝塔・第4図)の地下には、この宝物庫の一部が復元されており、重大発見の感動をしのぶことができる。

#### 4

その他、近代的展示設備の充実した上海博物館、華清池の新設の展示施設(唐華清宮御湯遺址博物館)と楊貴妃の入浴した浴槽などの復元状況、最近公開された秦軍隊の司令部の一つを模造したと考えられる兵馬俑3号館、1990年のアジア大会開催でひととき洗練された北京の町並みなど、記すべきことは枚挙にいとまがないほど充実した7日間であった。

末筆ながら、今回の訪中に際してお世話いただいた方々に、厚くお礼申し上げます。また、京都府と陝西省の友好関係が、来る平安建都1200年に向けて、益々発展することを期待いたしますとともに、今回の訪中の成果を、それらの行事に少しでもお役に立てることができれば、光栄だと思います。

(いその・ひろみつ=当センター調査第1課企画係調査員)

## 府内遺跡紹介

## 53. 浄妙寺跡

浄妙寺跡は、京都府宇治市木幡にあって、現在は小学校の敷地内となっている。この寺院は、宇治陵墓群の近くに建てられたことで、墓寺と解釈されている。堅田 修氏によれば、このような寺院は平安時代に入ってから出現したもので、元来の寺院のあり方からすれば、日本的と言うべきものとして指摘された。その後、森島康雄氏の研究によって類例が紹介されており、中世の墓地のあり方として比較的広い地域にわたって存在したことが指摘されている。

浄妙寺は、『本朝文粹』13所収の「為左大臣供養浄妙寺願文」や、『小右記』・『政事要略』所引の「木幡寺鐘銘並序」などの史料によれば、寛弘2(1005)年10月に藤原道長自らこの寺に赴いて供養が行われたのである。この寺院の建立が道長の肝いりで行われたことが理解できる。「木幡寺鐘銘並序」によれば、「元慶太政大臣昭宣公、相地之宜、永为一門埋骨之处」とあって、藤原基経が宇治の木幡の地を氏墓と定めたとある。この点については、林屋辰三郎氏が疑問をはさまれて、冬嗣・基経は深草に葬られており、木幡ではないとされた。しかし、その後、波多野忠雅氏や堅田 修氏の研究により、埋骨の場所としては、冬嗣夫妻・基経・時平らの墓のあることが確実となった。

ところが、その後この地に藤原氏で葬られたのは、兼家夫妻までないのである。むしろ、その間、藤原氏出身の皇后・皇太后や、その子女である親王の墓地を木幡に求めてはいる。ただ、藤原氏の氏長者は時平が宇治に墓地を造って以来、兼家夫妻までないのは、林屋辰三郎氏の言われるように、確かに「一門埋骨之处」とするのは、いささか疑問の残るところではある。

兼家夫妻以後は、通隆・道長をはじめ、歴代の氏長者が葬られるようになり、「一門埋骨之处」としてふさわしい墳墓地となった。林屋氏によれば、この浄妙寺の建立の目的は、道長流の今後の発展と、墓所の聖地化・荘厳化のためという。現実にはそのような意図が



遺跡所在地(1/50,000)

藤氏長者葬地一覧表

氏長者	薨去年	西暦	葬送地	出典
冬 嗣	天長 3. 7. 24	826	宇治郡(木幡)	日本紀略
冬嗣室	天長 5. 9. 5	828	宇治郡(木幡)	延喜・諸陵式
良 房	貞観14. 9. 2	872	愛宕郡白河辺	三代実録
基 経	寛平 3. 正. 13	891	宇治郡(木幡)	日本紀略
時 平	延喜 9. 4. 4	909	宇治郡(木幡)	延喜・諸陵式
忠 平	天曆 3. 8. 14	949	法性寺	日本紀略
顕 忠	康保 2. 4. 24	965	南白川東山辺	日本紀略
師 尹	安和 2. 10. 15	969	東山観音寺西岡	日本紀略
実 頼	天禄元. 5. 18	970	法性寺	日本紀略
在 衡	天禄元. 10. 10	970	法性寺	日本紀略
兼 通	貞元 2. 11. 8	977	東山霊雲寺	日本紀略
兼家室	天元 3. 正. 15	980	宇治郡(木幡)	御堂関白記
兼 家	正暦元. 7. 2	992	宇治郡(木幡)	御堂関白記
道 隆	長徳元. 4. 10	995	宇治郡(木幡)	栄華物語

あったことは確かであろうが、もっと政治的な意図が読み取れないであろうか。先の「木幡寺鐘銘并序」には、基経がこの木幡の地を墳墓地としたことが強調されているが、それを今、道長が改めて宣言していることからすれば、今後の藤氏長者が道長流に固定されることを意味していると取れないだろうか。実際、藤原伊周が失脚し政治的に全権を掌握して約10年が経過してから、道長自ら木幡に赴き、寺院の供養に参加しているだけでなく、その後の浄妙寺が藤氏

一門の菩提寺であるにもかかわらず、道長の家流に付属する寺院となった事実からみて、この推定はほぼ確実とみられよう。したがって、事実としては、林屋氏の考察のとおりであるが、政治的には、道長流に氏長者を固定する意図があったとみてよかろう。

このような意図のもとに建立された浄妙寺ではあるが、建久3(1192)年正月20日に木幡浄妙寺別当に聖護院宮静恵法親王を勅で補任している(『玉葉』)。こうして、浄妙寺の支配権は、摂関家から聖護院へと移ることになった。鎌倉時代には、聖護院の支配を受けていたようで、その後、寺勢もしだいに衰退していったことが推定されている。

寺院としての廃絶時期は、不明な点が多く、はっきりとしたことはわかっていない。文献上では、延慶2(1309)年8月に火災にあってることがみえており、杉山信三氏のように、この時以降廃絶したとする意見もある。ただ、林屋氏が指摘されたように、14世紀の古文書類にその存在が確認できるので、遅くとも15世紀後半の応仁の乱で廃絶したことはほぼ確実であろう。

このように、浄妙寺は、完全に廃絶してしまい、地上ではどのような伽藍配置をしていたか、まったくわからない状況であった。1966年になり、京都府教育委員会が主体となり、発掘調査が実施され、三昧堂の一角が発見されるに至り、にわか注目されるようになった。その時の成果では、三昧堂が檜皮葺であり、鎌倉時代以降に瓦が葺かれたこと、さらに火災にあった痕跡があり、延慶2年の火災が比較的信用できる事実であることなどが明

らかとなった。

1990年になって、宇治市立木幡小学校の運動場部分に残っていた三昧堂の位置を確定する目的で、宇治市教育委員会が主体となって発掘調査が行われた。その結果、三昧堂の遺構がすべて明らかになるとともに、その東側に多宝塔のならぶことが判明した。三昧堂は、一辺16mの基壇の上に5間×5間の建物があつたようで、基壇の周辺には束柱などの礎石の一部が出土している。また、周辺からは、瓦や青磁、建築部材などが出土しており、この時代の墓寺の実態を解明するうえで、貴重な資料ということができよう。

(土橋 誠)

<参考文献>

- 太田静六「藤原道長の邸宅に就いて」(『考古学雑誌』31-4・7 日本考古学会) 1941  
『宇治市史』第1巻 第5節 1973
- 杉山信三「浄妙寺発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1967)』 京都府教育委員会) 1967
- 林屋辰三郎「藤原道長の浄妙寺に就いて」(同『古代国家の解體』 岩波書店) 1955
- 波多野忠雅「藤原道長浄妙寺創建考—造営の背景に対する再検討を基調として—」(『史泉』39)  
1969
- 堅田 修「藤原道長の浄妙寺について—撰関時代寺院の一形態に関する考察—」(『撰関時代史の研究』 (財)古代学協会) 1965
- 森島康雄「中世墳墓に伴う建物」(『京都府埋蔵文化財論集』第2集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991

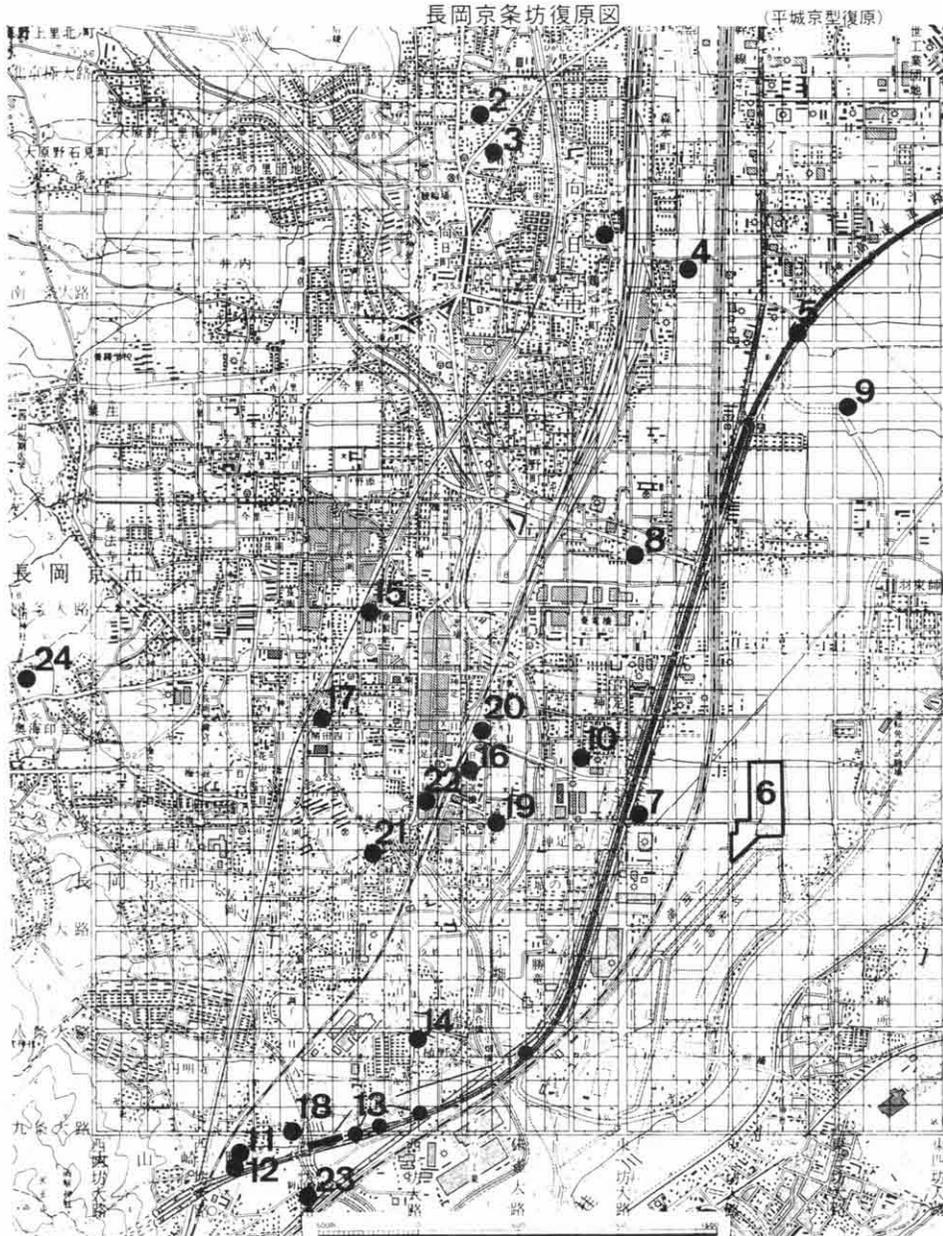
## 長岡京跡調査だより・39

平成3年8月28日・9月25日・10月23日に開催された長岡京連絡協議会で報告のあった発掘調査は、宮域3件、左京域7件、右京域12件、京外その他2件の計24件であった(一覧表・位置図参照)。このうち、主なものについて調査成果を簡単に紹介する。

調査地一覧表

(1991年10月末現在)

番号	次数	地区名	調査地	調査機関	調査期間
1	宮内258次	7AN3F	向日市森本町菰路11-1他	(財)向日市埋文	6/1~10/4
2	宮内261次	7AN11S	向日市寺戸町殿長7-1	(財)向日市埋文	7/23~7/29
3	宮内262次	7AN12K	向日市寺戸町西野辺25	(財)向日市埋文	10/1~
4	左京265次	7ANEJK-2	向日市鶏冠井町上古8-1~13-1	(財)向日市埋文	4/1~9/30
5	左京267次	7ANXKM他	京都市伏見区羽東師菱川町	(財)京都府埋文	6/1~
6	左京270次	7ANMND-1	京都市伏見区淀樋爪町	(財)京都市埋文	4/1~
7	左京271次	7ANMSB-3	長岡京市神足下八ヶ坪36-4他	(財)長岡京市埋文	10/7~
8	左京273次	7ANFKM-5	向日市上植野町鴨田1-1	(財)向日市埋文	7/16~8/23
9	左京274次	7ANVMK-3	京都市南区東土川町1-2他	(財)京都市埋文	9/10~9/18
10	左京275次	7ANMST-6	長岡京市神足芝本6	(財)長岡京市埋文	10/8~
11	右京349次	7ANXYT他	大山崎町円明寺百々	(財)京都府埋文	4/8~
12	右京367次	7ANSDD-C	大山崎町円明寺百々・井尻	(財)京都府埋文	7/2~
13	右京368次	7ANSID-2他	大山崎町円明寺壺町田他	(財)京都府埋文	4/8~
14	右京374次	7ANTDK	大山崎町下植野代理分10-1	大山崎町教委	5/28~
15	右京376次	7ANKAN	長岡京市開田一丁目6-6	(財)長岡京市埋文	6/25~
16	右京377次	7ANMTT-5	長岡京市東神足二丁目1-1	(財)長岡京市埋文	7/3~9/4
17	右京379次	7ANKTN-3	長岡京市開田三丁目401-3他	(財)長岡京市埋文	7/16~9/30
18	右京380次	7ANMSHC	大山崎町円明寺東ノ口24	大山崎町教委	7/8~7/24
19	右京381次	7ANMKO	長岡京市東神足二丁目、勝竜寺	(財)京都府埋文	8/1~10/30
20	右京382次	7ANMWY-5	長岡京市東神足二丁目10-1	(財)長岡京市埋文	8/21~9/26
21	右京383次	7ANMSC	長岡京市友岡二丁目414-4他	(財)長岡京市埋文	10/1~10/22
22	右京384次	7ANMKG	長岡京市神足二丁目117-1	(財)長岡京市埋文	10/24~
23	算用田遺跡	1K-16	大山崎町円明寺宝本	(財)京都府埋文	5/21~
24	海印寺第1次	7CKPME	長岡京市奥海印寺神前32	(財)長岡京市埋文	7/1~8/3



▽番号は一覧表・本文 ( ) 内と対応

調査地位置図

宮内第258次 (1)

(財)向日市埋蔵文化財センター

朝堂院北東及び宮内東辺官衙・森本遺跡を対象とする。長岡京期に関しては、掘立柱建物跡1棟と溝がある。溝より南側では同時期の遺構がないことから、同位置に南一条条間大路を延長した宮内道路の存在が想定されている。森本遺跡関連では、弥生中期から後期にかけての多数の遺物や、方形周溝墓もしくは方墳と思われる方形区画がある。遺物の出土量から集落の中心部に近い位置に当たるものと考えられる。

左京第270次 (6)

(財)京都市埋蔵文化財研究所

左京六条三坊域を対象とし、長岡京の東南部にあたる。京都市清掃局の埋立処分地拡張に伴う調査で対象面積は13haに及ぶ。昨年度からの継続調査で、これまでに東二坊大路と六条大路の交差点や人面墨書土器・模型カマド・土馬・人形等の多量の祭祀遺物を含む河川跡、橋跡、しがらみ跡が検出されている。

今回の調査区では、長岡京期の下層から古墳時代の水田遺構と流路が確認されている。水田跡は、桂川右岸の標高8m前後の緩やかな傾斜をもつ後背湿地上に営まれており、傾斜に沿う北西→南東方向の幹線的なアゼと、それをさらに縦横に細かく分割するアゼで形成される。水田の一区画は5～150㎡と小さい。水口の施設の他、水田面やアゼ上から人や牛の足跡が多数見つかっている。水田の時期は、上面を覆う砂礫層の状況や出土遺物から、古墳時代前期から6世紀後半頃と考えられている。22,000㎡に及ぶ大規模な水田跡の調査は京都府内では始めてである。

右京第349・367次

(11・12)

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

右京九条及び百々遺跡の調査。西国街道西側溝を確認。溝最下層から9世紀後半の土器が出土。溝の埋没は10世紀代と推定。この他、古墳時代後期の竪穴式住居跡1、平安～中世の掘立柱建物跡5、井戸跡4がある。西国街道沿いで検出した井戸跡は、横板8段組で上2段は井籠に組まれている。底面近くから緑釉陶器碗2個体が出土し、井戸の廃棄時期は10世紀中頃と想定される。

(辻本和美)

## センターの動向(3. 8～10)

1. できごと
8. 1 都出比呂志理事、北部発掘現場視察  
長岡京跡右京第381次(長岡京市)発掘調査開始
- 9 高田山古墳(福知山市)現地説明会  
川向北古墳(園部町)発掘調査終了(5.7～)
- 12 小林秀臣京都府農業総合研究所主任研究員、内里八丁遺跡(八幡市)現地指導  
樋ノ口遺跡(木津町・精華町)発掘調査終了(4.15～)
- 13 樋口隆康副理事長、樋ノ口遺跡(木津・精華町)現地視察  
松阪事務局長、樋ノ口遺跡現地視察
- 17 第63回研修会(別掲)  
第9回小さな展覧会「京都発掘'91」開会
- 19 野中城跡(久美浜町)試掘調査開始  
池尻遺跡(亀岡市)発掘調査開始  
平安京跡隣接地(京都市)発掘調査開始
- 20 裏陰遺跡(大宮町)発掘調査開始
- 21 西野是夫京都府教育長、遠所遺跡(弥栄町)現地視察
- 22 堤圭三郎理事、天若遺跡(日吉町)・鹿谷遺跡(亀岡市)現地視察
- 23 関係役員協議会(於・当調査研究センター)出席(福山敏男理事長、樋口隆康副理事長、松阪寛支常務理事、中沢圭二、川上貢、藤井学、足利健亮、佐原眞、藤田价浩、木村英男、堤圭三郎の各理事)
- 24～25 全国埋蔵文化財研究集会(於・福岡市西南学院大学)出席(小山係長、竹原、岩松各調査員)
- 28 長岡京連絡協議会
- 29 こくばら野遺跡(久美浜町)現地説明会
- 30 こくばら野遺跡発掘調査終了(5.14～)
9. 4 川上貢理事、百々遺跡(大山崎町)現地指導
- 7 瀬後谷遺跡(木津町)現地説明会
- 10 堤谷古墳群(久美浜町)現地説明会・発掘調査終了(5.7～)  
野中城跡試掘調査終了(8.19～)  
町田章奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部長、瀬後谷遺跡現地指導
- 11 全国埋蔵文化財法人連絡協議会  
近畿ブロック主担当者会議(於・大阪市)出席(中谷次長、安藤課長)
- 18 細谷古墳群(綾部市)発掘調査開始
- 19～20 全国埋蔵文化財法人連絡協議会  
研修会(於・奈良市)出席(辻本係長、

- |   |  |
|---|--|
| <p>水谷係長、杉江主事)</p> <p>19 鹿谷遺跡(亀岡市)現地説明会<br/>松阪局長、百々遺跡現地視察</p> <p>20 足利健亮理事、木津町山田地区現<br/>地指導<br/>松阪局長、天若遺跡現地視察</p> <p>25 工楽善通奈良国立文化財研究所<br/>集落遺跡研究室長、内里八丁遺跡現<br/>地指導<br/>裏陰遺跡関係者説明会<br/>長岡京連絡協議会</p> <p>27 樋ノ口遺跡発掘調査終了(4.8~)</p> <p>30 職員研修会(於・当調査研究センタ<br/>ー研修室)講師、足利健亮理事「樋ノ<br/>口遺跡を山田寺にあてる考証」</p> <p>10.1 興戸遺跡(田辺町)発掘調査開始</p> <p>2 中沢圭三理事、内里八丁遺跡現地<br/>指導</p> <p>4 両丹文化財連絡協議会(於・舞鶴<br/>市文化会館)出席(安藤課長)</p> <p>6 第64回研修会(別掲)</p> <p>8 コンピューター検討委員会</p> <p>9 裏陰遺跡発掘調査終了(8.20~)</p> <p>11 長岡京跡右京第368次のうち(名神<br/>下植野D地区)発掘調査終了(4.14~)</p> <p>15 高谷好一京都大学東南アジア研<br/>究センター教授、内里八丁遺跡現地<br/>指導</p> <p>16 安全衛生委員会</p> <p>18 堂ノ上遺跡(山城町)現地説明会</p> <p>22 蔵ヶ崎遺跡(加悦町)発掘調査開始</p> <p>23 細谷古墳群関係者説明会</p> | <p>長岡京連絡協議会</p> <p>25 通り古墳群(大宮町)現地説明会<br/>全国埋蔵文化財法人連絡協議会 近<br/>畿ブロック事務担当者会議(於・長岡<br/>京市)出席(安田係長・杉江・今村主<br/>事)</p> <p>28 通り古墳群発掘調査終了(5.8~)</p> <p>30 岡村道雄文化庁文化財調査官、上<br/>人ヶ平遺跡(木津町)現地視察<br/>長岡京跡右京第381次関係者説明会<br/>細谷古墳群発掘調査終了(9.18~)<br/>堂ノ上遺跡発掘調査終了(7.19~)</p> <p>31 職員研修会(於・向日市文化資料館<br/>研修室)講師、岡村道雄文化庁文化財<br/>調査官「埋蔵文化財の保護行政の最<br/>近の傾向と問題点」</p> <p><b>2. 普及啓発事業</b></p> <p>8.17 第63回研修会(於・向日市民会館)<br/>ー平成2年度の調査から一戸原和人<br/>「長岡京市雲宮遺跡の発掘調査」、<br/>安田 章「峰山町大耳尾古墳群の発<br/>掘調査」、鶴島三寿「八木町八木嶋<br/>遺跡の発掘調査」、一展示解説：辻<br/>本和美「第9回小さな展覧会見学」<br/>(於・向日市文化資料館)</p> <p>8.17~9.1 第9回小さな展覧会「京都発<br/>掘'91」(於・向日市文化資料館)</p> <p>10.6 第64回研修会ーバスによる現地研<br/>修：河内飛鳥をたずねてー現地講<br/>師：笠井敏光</p> <p style="text-align: right;">(安藤信策)</p> |
|---|--|

## 府内報告書等刊行状況一覧(90.11～91.10)

## 発掘調査報告書関係

- 『埋蔵文化財発掘調査概報(1991)』 京都府教育委員会 1991.3
- 『長岡京市文化財調査報告書』 第27冊 長岡京市教育委員会 1991.3
- 『長岡京市文化財調査報告書』 第28冊 同上 1991.3
- 『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』 第9集 大山崎町教育委員会 1991.3
- 『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』 第10集 同上 1991.3
- 『八幡市文化財調査概報』 第9集 八幡市教育委員会 1991.3
- 『宇治市埋蔵文化財調査概報』 第17集 宇治市教育委員会 1991.3
- 『城陽市埋蔵文化財調査報告書』 第21集 城陽市教育委員会 1991.3
- 『加茂町文化財調査報告』 第8集 加茂町教育委員会 1990.3
- 『綾部市文化財調査報告』 第17集 綾部市教育委員会 1990.3
- 『綾部市文化財調査報告』 第18集 同上 1991.3
- 『福知山市文化財調査報告書』 第18集 福知山市教育委員会 1990.3
- 『福知山市文化財調査報告書』 第19集 同上 1991.3
- 『舞鶴市文化財調査報告』 第14集 舞鶴市教育委員会 1990.3
- 『舞鶴市文化財調査報告』 第15集 同上 1990.3
- 『舞鶴市文化財調査報告』 第16集 同上 1990.3
- 『宮津市文化財調査報告』 第20集 宮津市教育委員会 1990.3
- 『宮津市文化財調査報告』 第22集 同上 1991.3
- 『加悦町文化財調査報告』 第14集 加悦町教育委員会 1991.3
- 『野田川町文化財調査報告』 第6集 野田川町教育委員会 1991.3
- 『野田川町文化財調査報告』 第8集 同上 1991.3
- 『大宮町文化財調査報告』 第7集 大宮町教育委員会 1991.3
- 『京都府弥栄町文化財調査報告』 第6集 弥栄町教育委員会 1991.3
- 『京都府弥栄町文化財調査報告』 第7集 同上 1991.3
- 『京都府丹後町文化財調査報告』 第7集 丹後町教育委員会 1991.3
- 『京都府丹後町文化財調査報告』 第8集 同上 1991.3
- 『平安京跡発掘調査概報 平成2年度』 京都市埋蔵文化財調査センター 1991.3
- 『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成2年度』 同上 1991.3

- 『鳥羽離宮跡発掘調査概報 平成2年度』 同上 1991.3  
『北野廃寺・北白川廃寺発掘調査概報 平成2年度』 同上 1991.3  
『向日市埋蔵文化財調査報告書』 第19集 (財)向日市埋蔵文化財センター 1991.3  
『向日市埋蔵文化財調査報告書』 第31集 同上 1991.3  
『向日市埋蔵文化財調査報告書』 第32集 同上 1991.3  
『京都大学埋蔵文化財調査報告』 IV 京都大学埋蔵文化財研究センター 1991.3  
『同志社高等学校理科館改築に伴う埋蔵文化財の調査』 同志社大学校地学術調査委員会  
1991.3  
『古代學研究所研究報告』 第2輯 (財)古代學協會 1991.3

当調査研究センター現地説明会・中間報告資料

現地説明会

- 「長岡京跡左京第252次」 (京埋セ現地説明会資料 No90-07) 1990.11.22  
「平安京左京」 (同 No90-08) 1990.11.28  
「こくばら野遺跡」 (同 No90-09) 1990.11.29  
「天若遺跡」 (同 No90-10) 1990.12.18  
「興戸遺跡」 (同 No90-11) 1990.12.20  
「遠所遺跡」 (同 No90-12) 1990.12.20  
「内里八丁遺跡」 (同 No91-01) 1991.1.19  
「桑飼上遺跡」 (同 No91-02) 1991.1.19  
「八木嶋遺跡」 (同 No91-03) 1991.2.15  
「伏見城跡」 (同 No91-04) 1991.2.20  
「左坂古墳群」 (同 No91-05) 1991.2.22  
「蔵ヶ崎遺跡」 (同 No91-06) 1991.3.2  
「百々遺跡」 (同 No91-07) 1991.3.2  
「小谷17号墳」 (同 No91-08) 1991.6.28  
「川向北1号墳」 (同 No91-09) 1991.7.12  
「樋ノ口遺跡」 (同 No91-10) 1991.7.20  
「高田山古墳群第2次」 (同 No91-11) 1991.8.9  
「こくばら野遺跡」 (同 No91-12) 1991.8.29  
「瀬後谷遺跡」 (同 No91-13) 1991.9.7  
「堤谷古墳群」 (同 No91-14) 1991.9.10

- 「鹿谷遺跡」 (同 No91-15) 1991.9.19  
「堂ノ上遺跡」 (同 No91-16) 1991.10.18  
「通り古墳群」 (同 No91-17) 1991.10.25

#### 中間報告

- 「興戸遺跡第8次」 (京埋七中間報告資料 No90-14) 1990.11.2  
「燈籠寺遺跡」 (同上 No91-01) 1991.1.22  
「荒堀遺跡」 (同上 No91-02) 1991.1.30  
「長岡京跡右京第363次」 (同上 No91-03) 1991.1.24  
「長岡京跡左京第241・242次」 (同上 No91-04) 1991.2.6  
「宮津城跡」 (同上 No91-05) 1991.2.8  
「平安宮大極殿院跡」 (同上 No91-06) 1991.5.17  
「史跡教王護国寺境内」 (同上 No91-07) 1991.7.4  
「燈籠寺遺跡」 (同上 No91-08) 1991.7.12  
「下畑遺跡」 (同上 No91-09) 1991.7.30  
「裏陰遺跡」 (同上 No91-10) 1991.9.25  
「細谷古墳群」 (同上 No91-11) 1991.10.23  
「長岡京跡右京第381次調査」 (同上 No91-12) 1991.10.30

#### 府内現地説明会資料

- 「恭仁宮跡」 京都府教育委員会 1990.12.12  
「堤谷古墳群・豊谷弥生墳墓・豊谷中世墓群」 同上 1991.6.14  
「堤谷窯跡群」 同上 1991.8.21  
「平等院庭園」 宇治市教育委員会・平等院 1991.2.18  
「五ヶ庄二子塚古墳」 宇治市教育委員会 1991.7.13  
「車谷古墳」 山城町教育委員会 1990.11.23  
「倉谷丸山2号墳」 舞鶴市教育委員会 1990.12.8  
「倉谷遺跡」 同上 1991.6.29  
「宮津城跡第7次」 宮津市教育委員会 1991.3.2  
「菅外遺跡」 大宮町教育委員会 1991.7.4  
「大耳尾古墳群」 峰山町教育委員会 1991.3.16  
「離湖古墳」 網野町教育委員会 1991.10.13

- 「北白川廃寺」 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1991.3.16  
「長岡京跡左京第270次」 同上 1991.9.14  
「長岡京跡左京第265次」 (財)向日市埋蔵文化財センター 1991.7.27  
「長岡京跡右京第365次」 (財)長岡京市埋蔵文化財センター 1991.3.31  
「長岡京跡右京第365次」 同上 1991.5.18  
「史跡札の森第2次発掘調査」 史跡賀茂御祖神社境内整備委員会 1991.10.2

その他の雑誌・報告・論文等

- 「京都府埋蔵文化財情報」 第38号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1990.12  
「京都府埋蔵文化財情報」 第39号 同上 1991.3  
「京都府埋蔵文化財情報」 第40号 同上 1991.6  
「京都府埋蔵文化財情報」 第41号 同上 1991.9  
「京都府遺跡調査概報」 第40冊 同上 1991.3  
「京都府遺跡調査概報」 第41冊 同上 1991.3  
「京都府遺跡調査概報」 第42冊 同上 1991.3  
「京都府遺跡調査概報」 第43冊 同上 1991.3  
「京都府遺跡調査概報」 第44冊 同上 1991.3  
「京都府遺跡調査概報」 第45冊 同上 1991.3  
「京都府遺跡調査報告書」 第14冊 同上 1990.12  
「京都の文化財」 第9集 京都府教育委員会 1991.3  
「京都市文化財ボックス」 第6集 京都市文化観光局文化財保護課 1991.3  
「京都市の文化財」 第8集 同上 1991.3  
「京都市文化財だより」 第15～16号 同上 1991.6～10  
「長岡京市史 資料編(1)」 長岡京市 1991.3  
「加茂町史 第二卷(近世編)」 加茂町 1991.2  
「加茂町史編さんだより紫陽花」 第11号 同上 1991.5  
「朽木綱貞絵画」 福知山市 1991.10  
「市史編さんだより」 第1～2号 宮津市教育委員会 1991.3～10  
「歴史シンポジウム 丹後と古代製鉄」 弥栄町教育委員会 1991.1  
「長岡京市埋蔵文化財センター年報 平成元年度」 (財)長岡京市埋蔵文化財センター  
1991.3  
「文化財報」 第71～74号 (財)京都府文化財保護基金 1990.11～1991.8

- 『会報』 第70～71号 (財)京都古文化保存協会 1991.1～10
- 『丹後郷土資料館だより』 第21～22号 京都府立丹後郷土資料館 1991.3～9
- 『丹後郷土資料館友の会ニュース』 No35 同上 1991.1
- 『ふるさとの塩づくり 特別陳列図録28』 同上 1991.4
- 『由良川の遺跡—私たちの考古学Ⅱ—特別陳列図録29』 同上 1991.7
- 『山城郷土資料館だより』 第14～15号 京都府立山城郷土資料館 1991.3～10
- 『企画展資料14 発掘成果速報—平成2年度の調査から—』 同上 1991.9
- 『展示図録11 京都府のはにわ』 同上 1991.10
- 『総合資料館だより』 No86～89 京都府立総合資料館 1991.1～10
- 『京都府資料目録追録』 No7 同上 1991.3
- 『資料館紀要』 第19号 同上 1991.3
- 『平成元年度 京都国立博物館年報』 京都国立博物館 1991.2
- 『京都市歴史資料館紀要』 第8号 京都市歴史資料館 1991.3
- 『平成2年度 京都市歴史資料館年報』 同上 1991.3
- 『公家・武家・寺家』 同上 1991.5
- 『企画展図録 京都市の文化財新指定の美術工芸品』 同上 1991.6
- 『泉屋博古館紀要』 第七巻 (財)泉屋博古館 1991.2
- 『向日市古文書調査報告書』 第1集 向日市文化資料館 1991.3
- 『特別展「女性の装い」展示図録』 同上 1991.5
- 『特別展 源氏物語の世界—王朝文化への憧憬—』 宇治市歴史資料館 1991.10
- 『開館5周年記念特別展 明智光秀と丹後・亀岡』 亀岡市文化資料館 1990.11
- 『第11回企画展図録 尊氏と丹波の土豪』 同上 1991.5
- 『第7回特別展展示図録 天平の巨大プロジェクト国分寺』 同上 1991.10
- 『福知山城の石垣』 福知山市郷土資料館 1990.11
- 『京都大学文学部博物館図録』 第4冊 京都大学文学部博物館 1991.4
- 『第42トレンチ』 京都大学考古学研究会 1990.11
- 『鷹陵史学』 第17号 佛教大学歴史研究所 1991.3
- 『土車』 第57～59号 (財)古代学協会 1991.1～7
- 『古代文化』 第384～392号 同上 1991.1～10
- 『京都考古』 第58～62号 京都考古刊行会 1991.2～10
- 『志くれてい』 第35～38号 (財)冷泉家時雨亭文庫 1990.12～1991.9
- 『波布理曾能』 第8号 精華町の自然と歴史を学ぶ会 1991.4

- 『精華町文化財愛護会だより』 第8号 精華町文化財愛護会 1991.4
- 『口丹波史料 8』 口丹波史談会 1990.11
- 『丹波史談』 133号 同上 1991.3
- 『史談ふくち山』 第466～471号 福知山史談会 1991.1～6
- 『郷土誌八木』 第4号 八木史談会 1991.3
- 『綾部の文化財』 第32号 綾部の文化財を守る会 1991.4
- 『京都滋賀 古代地名を歩くⅡ』 (株)京都新聞社 1991.1
- 『図説日本の史跡』 第2巻 (株)同朋舎出版 1991.5
- 『日本人と鏡』 同上 1991.10
- 『中世考古美術と社会』 (株)思文閣出版 1991.7

受贈図書一覧(3.8.1~3.10.31)

苫小牧市埋蔵文化財調査センター	とまこまい埋文だより No24
岩手県立埋蔵文化財センター	わらびて No53
(財)福島県文化センター	福島県文化財調査報告書 第221~224・226~238・240~241・243~245・249~250・253~256集
(財)いわき市教育文化事業団	いわき市埋蔵文化財調査報告 第28・30冊
(財)茨城県教育財団	年報10 平成2年度、茨城県教育財団文化財調査報告 第61~69集
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 前橋市埋蔵文化財発掘調査団・ 前橋市教育委員会	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書 第110集 前田遺跡、棗遺跡、伊勢遺跡、横俵遺跡群 I・III、柿木II遺跡、熊野谷II・III遺跡、内堀遺跡群 IV、元総社明神遺跡 I X
(財)千葉県文化財センター	研究連絡誌 第31~32号、千葉県文化財センター年報 No16、 千葉県文化財センター調査報告書 第188~203集
(財)印旛郡市文化財センター	財団法人 印旛郡市文化財センター調査報告書 第28・38~39・42・46・48~50・53~54集
(財)君津郡市文化財センター	君津郡市文化財センター研究紀要 IV、年報 No8~9
(財)山武郡市文化財センター	(財)山武郡市文化財センター発掘調査報告書 第8集
(財)長生郡市文化財センター	長生郡市文化財センター年報 No5、(財)長生郡市文化財センター調査報告 第9~11集
富山県埋蔵文化財センター 山梨県埋蔵文化財センター	埋文とやま 第35号 年報 7、山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第60~61・63・65集
(財)山梨文化財研究所	湯之奥金山遺跡第2次調査概報
長野県埋蔵文化財センター	長野県埋蔵文化財ニュース No32
(財)岐阜県文化財保護センター	文化財保護センターだより 創刊号
(財)愛知県埋蔵文化財センター	埋蔵文化財愛知 No25~26、年報 平成2年度、(財)愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第18・20~25・30・36集
(財)滋賀県文化財保護協会	滋賀文化財だより No158~159、文化財調査出土遺物仮収納保管業務 平成2年度発調査概要、一般県道野洲中主線改良事業に伴う中北遺跡発掘調査報告書、守山川中小河川改修事業に伴う大宮遺跡発掘調査報告書、金剛寺・後川遺跡発掘調査報告書 II 滋賀県守山市服部町所在服部遺跡発掘調査報告書 II、県営かんがい排水事業関連遺跡発掘調査報告書 VII-1~3、ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書 XVIII-2~7
滋賀県埋蔵文化財センター 守山市立埋蔵文化財センター	滋賀埋文ニュース 第137~139号 守山市文化財調査報告書 第37~38・43冊
(財)大阪文化財センター	大阪文化財研究 創刊号、第9回 近畿地方埋蔵文化財研究会

(財)大阪市文化財協会  
(財)東大阪市文化財協会  
(財)八尾市文化財調査研究会

奈良国立文化財研究所

(財)広島県埋蔵文化財センター  
広島県草戸千軒町遺跡調査研究所  
(財)徳島県埋蔵文化財センター  
(財)香川県埋蔵文化財調査センター  
(財)北九州市教育文化事業団  
埋蔵文化財調査室

深川市教育委員会  
岩手県教育委員会  
胆沢町教育委員会  
陸前高田市教育委員会  
仙台市教育委員会  
いわき市教育委員会  
群馬町教育委員会  
成田市教育委員会

寒川町教育委員会  
小松市教育委員会

一宮町教育委員会

塩山市教育委員会  
岡谷市教育委員会  
茅野市教育委員会

大垣市教育委員会  
新居町教育委員会  
愛知県教育委員会  
瀬戸市教育委員会  
豊田市教育委員会

資料、大阪府下埋蔵文化財研究会(第24回)資料、大坂城跡発掘調査概要 1

葦火 33~34号

東大阪市文化財協会ニュース Vol.5 No.3

平成2年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告、(財)八尾市文化財調査研究報告 28~30

奈良国立文化財研究所学報 第49冊、奈良国立文化財研究所年報 1990、平城宮発掘調査出土木簡概報 24、平城宮跡発掘調査部発掘調査概報 1990年度

ひろしまの遺跡 第46号

草戸千軒 No.214~215

徳島県埋蔵文化財センター年報 平成2(1990)年度

いにしへの讃岐 創刊号

研究紀要 第5号、埋蔵文化財調査室年報7 平成元年度、北九州市埋蔵文化財調査報告書 第88・95・97・100~111集

深川市内園3遺跡

岩手県文化財調査報告書 第90集

埋蔵文化財調査報告書 第21集

陸前高田市文化財調査報告書 第12・14~15集

仙台市文化財調査報告書 第153集

いわき市埋蔵文化財調査報告書 第29冊

群馬町埋蔵文化財調査報告 第30集

成田都市計画事業成田駅西口土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書

岡田おこり塚(十三塚)発掘調査報告書

那谷桃の木山古窯跡発掘調査報告書、平成元年度 戸津古窯跡群発掘調査報告書

大原遺跡発掘調査概報、北大内遺跡・矢倉遺跡、筑前原墨跡発掘調査報告書、甲斐国分寺跡—寺域及び遺構確認を目的とした緊急発掘調査報告書—

黒川金山史料

榎垣外・広畑・新井南遺跡発掘調査報告書

上原城下町遺跡、上見遺跡—県営圃場整備事業に係る埋蔵文化財緊急発掘調査報告書—、国特別史跡尖石遺跡—保存整備事業に係る試掘調査報告書—

大垣市文化財調査報告書 第16~19集

三ツ谷地区区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書

愛知県埋蔵文化財情報6 平成元年度

昭和63・平成元年度 瀬戸市埋蔵文化財年報

豊田市文化財叢書 第6・21、豊田市郷土資料館 10・14

- |             |   |
|-------------|---|
| 嬉野町教育委員会    | 嬉野町埋蔵文化財調査概要 平成元年度、嬉野町埋蔵文化財調査報告 第9集   |
| 度会町教育委員会    | 度会町文化財調査報告 5  |
| 五個荘町教育委員会   | 五個荘町文化財調査報告 18~19   |
| 山東町教育委員会    | 山東町埋蔵文化財調査報告書 VII   |
| 能登川町教育委員会   | 能登川町埋蔵文化財調査報告書 第19~22集  |
| 野洲町教育委員会    | 宮山二号墳—史跡大岩山古墳群保存整備事業報告 1一、野洲町文化財資料集 1991-1-2・4  |
| 八日市市教育委員会   | 八日市市文化財調査報告 10  |
| 貝塚市教育委員会    | 貝塚市埋蔵文化財調査報告 第20~22集  |
| 柏原市教育委員会    | 柏原市文化財概報 1990-I~III   |
| 吹田市教育委員会    | 吹田市文化財ニュース No12、平成2年度 埋蔵文化財緊急発掘調査概報   |
| 大東市教育委員会    | 大東市埋蔵文化財調査報告 第8集  |
| 豊中市教育委員会    | 文化財ニュース豊中 No15、螢池東遺跡発掘調査報告書、豊中市文化財調査報告 第29集   |
| 加西市教育委員会    | 加西市埋蔵文化財報告 5~6  |
| 西宮市教育委員会    | 西宮市文化財資料 第34号   |
| 加東郡教育委員会    | 加東郡埋蔵文化財報告 12   |
| 西紀、丹南町教育委員会 | 西紀、丹南町文化財調査報告 第8集   |
| 新宮町教育委員会    | 新宮町古文書目録 第6集、新宮町文化財調査報告 14  |
| 天理市教育委員会    | 赤土山古墳第3次調査概報、天理市埋蔵文化財発掘調査概要報告1990年度   |
| 香芝町教育委員会    | 郡ヶ池遺跡—中和幹線建設に伴う発掘調査報告—  |
| 岩美町教育委員会    | 岩美町文化財調査報告書 第15~16集   |
| 益田市教育委員会    | 小丸山古墳発掘調査報告書、益田市遠田地区遺跡分布調査報告書III 1988年度、三宅御土居跡発掘調査報告書 1990年度  |
| 大社町教育委員会    | 原山遺跡発掘調査概報  |
| 総社市教育委員会    | 総社市埋蔵文化財発掘調査報告 9  |
| 東城町教育委員会    | 広島県比婆郡東城町所在湯谷たたら  |
| 大野城市教育委員会   | 大野城市歴史資料展示室解説図録、大野城市の文化財 第22~23集、大野城市文化財調査報告書 第31~33集   |
| 春日市教育委員会    | 春日市文化財調査報告書 第21集  |
| 太宰府市教育委員会   | 太宰府市の文化財 第16~17集  |
| 佐賀市教育委員会    | 佐賀市文化財調査報告書 第34~35集   |
| 千代田町教育委員会   | 千代田町文化財調査報告書 第13集   |
| 宇佐市教育委員会    | 一般国道10号宇佐道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報、一般国道10号宇佐・別府道路に伴う埋蔵文化財発掘調査概報、宇佐地区遺跡群発掘調査概報 高森城跡 4次調査・小部遺跡 7次調査・虚空蔵寺跡 6次調査 |
| 佐伯市教育委員会    | 佐伯地区遺跡群発掘調査概報 III   |

安岐町教育委員会 千歳村教育委員会	安岐町文化財調査報告書 第1集 高添台地の遺跡—大分県大野郡千歳村高添地区所在遺跡の調査報告書—
直入町教育委員会	大分県直入郡直入町所在遺跡の発掘調査 横枕B遺跡・前田遺跡
釧路市立博物館	釧路市立博物館々報 No.325～329、釧路市立博物館収蔵資料目録 XI、釧路市立博物館紀要 第16輯 博物館ニュース No.85、館報 平成2年度 さきたま No.3
秋田県立博物館 埼玉県立さきたま資料館 国立歴史民俗博物館 千葉県立房総風土記の丘資料館 流山市立博物館 調布市郷土博物館 出光美術館 石川県立歴史博物館 小松市立博物館 福井県立朝倉氏遺跡資料館	歴博 第48～49号 千葉県立房総風土記の丘だより 第22号 年報 No.13 テーマ展 深大寺そば 出光美術館館報 第75号 石川れきはく 第21号、すまひ・角力・相撲 小松市立博物館だより 第50号 朝倉氏遺跡資料館紀要 1990、特別史跡—乗谷朝倉氏遺跡(平成2年度発掘調査環境整備事業概要 22)、特別史跡—乗谷朝倉氏発掘調査報告 III 紀要 第6号
敦賀市立歴史民俗資料館 三方町立郷土資料館	古三方湖周辺の縄文遺跡展—ユリ遺跡出土2号丸木舟の出土状況再現—
山梨県立考古博物館 茅野市尖石考古館・茅野市八ヶ岳総合博物館・茅野市美術館 沼津市歴史民俗資料館	山梨県立考古博物館だより No.24 茅野市博物館だより八ヶ岳通信 No.5 資料館だより 97～99、沼津市歴史民俗資料館資料集 9、沼津市博物館紀要 15、特別展 風の世界
浜松市博物館 名古屋市博物館	浜松市博物館だより 35号、お茶とくらし 特別展 うつわの美—食をいろどる—、名古屋市博物館研究紀要第14巻、名古屋市博物館年報 No.14
名古屋市見晴台考古資料館	特別展 古墳時代の人びと—尾張の個性と力—、NN258号窯発掘調査の概要、富士見町遺跡第2次発掘調査の概要、貴生町遺跡第3～5次調査の概要、高蔵遺跡第4次発掘調査の概要、瑞穂区大喜新町大喜遺跡発掘調査の概要
大津市歴史博物館 彦根城博物館 大阪府立弥生文化博物館 八尾市立歴史民俗資料館	博物館だより 第6～7号 彦根城博物館だより 15 弥生文化博物館要覧、大阪府立弥生文化博物館図録 2 研究紀要 第2号、八尾市立歴史民俗資料館館報 平成元年・2年度、古代氏族とその遺宝—W・ゴーランド教授を顕彰して—
大阪城天守閣	大阪城天守閣紀要 第19号

神戸市立博物館	博物館だより No37、神戸市立博物館年報 No6、神戸市立博物館研究紀要 第6号、神戸市立博物館館蔵品目録考古・歴史の部 6、同 地図の部 6、同 美術の部 6
西宮市立郷土資料館	西宮市立郷土資料館だより 第9号、収蔵資料目録 第1集、研究報告 第1集、西宮市立郷土資料館報 平成2年度、第6回特別展「西宮の職人たち」展示案内図録
播磨町郷土資料館	慈悲とねがい—ふるさとのみ佛と民衆
和歌山県立紀伊風土記の丘 管理事務所	はにわ—埴輪と古墳時代—図録
鳥根県立八雲立つ風土記の丘	八雲立つ風土記の丘 No109~110、古代の出雲と九州~海流に乗って、山脈を越えて~
出雲玉作資料館	玉作資料館ニュース 第17号
広島県立歴史博物館	広島県立歴史博物館ニュース 第8号
(財)日本はきもの博物館	日本はきもの博物館だより 43
山口県立山口博物館	山口県立山口博物館研究報告 第17号
大分県立宇佐風土記の丘 歴史民俗資料館	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館ニュース No26、宇佐歴史民俗資料館年報 平成2年度、免ヶ平古墳—史跡川部・高森古墳群保存修理事業報告書—
東北学院大学東北文化研究所 筑波大学歴史・人類学系	東北文化研究所紀要 第23号 筑波大学先史学・考古学研究 第1~2号、筑波大学先史学・考古学研究調査報告 5
早稲田大学校地埋蔵文化財 調査室	早大埋蔵文化財調査月報 No76~77
大谷女子大学資料館	大谷女子大学資料館だより No50~51
天理大学附属天理参考館	天理参考館報 第4号
鳥根大学山陰地域研究総合センター	山陰地域研究 第7号
広島大学統合移転地埋蔵文化財 調査委員会	広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査室年報 IX
熊本大学文学部考古学研究室	研究室活動報告 25~26
北網圏北見文化センター 山武考古学研究所	南町遺跡 II 山武考古学研究所年報 No8、妙義町の遺跡 1、日立市文化財調査報告 第24集、石岡市鹿の子遺跡発掘調査報告書、茨城県行方郡玉造町玉造遺跡、専光寺付近遺跡 平成2年度発掘調査報告書、古海松塚古墳群 平成2年度発掘調査概報
国立国会図書館	日本全国書誌 No1819
都営川越道住宅遺跡調査会	武蔵台東遺跡発掘調査概報 1
五段田遺跡調査会	五段田遺跡 II
鶴川第二地区遺跡調査会	真光寺・広袴遺跡群 V

(株)角川書店  
(株)集英社  
(株)ジャパン通信社  
雄山閣出版株式会社  
(株)名著出版  
ニュー・サイエンス社  
鎌倉考古学研究所

黒川地区遺跡調査団  
下鶴間甲一号遺跡調査団  
全国天領ゼミナール事務局

(財)栗東町文化体育振興事業団  
(財)古代学協會  
(株)同朋舎出版  
長谷川書店  
狭山池調査事務所  
大東市北新町遺跡調査会  
高山歴史学研究所  
六甲山麓遺跡調査会  
淡神文化財協会  
(財)由良大和古代文化研究協会  
朝鮮学会  
博物館等建設推進九州会議

(財)京都市埋蔵文化財研究所  
(財)向日市埋蔵文化財センター  
(財)長岡京市埋蔵文化財センター  
京都府教育委員会

弥栄町教育委員会  
加悦町教育委員会  
福知山市  
福知山市教育委員会  
長岡京市教育委員会  
京都府立丹後郷土資料館

新版古代の日本 第6卷(近畿Ⅱ)  
日本の歴史2 倭人争乱  
月刊文化財発掘出土情報 第106号  
季刊考古学 第37号  
歴史手帖 第215~217号  
考古学ジャーナル No.339  
史跡若宮大路遺跡発掘調査報告書 V、神奈川県鎌倉市政所跡  
(雪ノ下三丁目987番1・2)、笹目遺跡発掘調査報告書(鎌倉市笹目町330番-1地点)、鎌倉市平成元年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査 杉本城跡内やぐら・宅間ヶ谷やぐら群  
同 佐助ヶ谷遺跡内やぐら・弁ヶ谷遺跡内やぐら群・公方屋敷跡内やぐら・瑞泉寺周辺遺跡内やぐら、鎌倉市由比ヶ浜1-117-1地点遺跡  
黒川地区遺跡群報告書Ⅲ  
神奈川県大和市下鶴間甲一号遺跡  
第6回全国天領ゼミナール記録集、第7回全国天領ゼミナール資料集  
埋蔵文化財発掘調査 1990年度年報  
古代文化 第391~393号、土車 第59号  
日本人と鏡  
古墳発掘品調査報告  
狭山池調査事務所 平成2年度調査報告書  
北新町遺跡第2次発掘調査概要報告書  
高山歴史学研究所文化財調査報告書 第1冊  
口酒井遺跡—自然遺物編—  
淡神文化財協会ニュース 第16~17号、タイの土器作り  
朝鮮三国時代陶質土器の研究  
朝鮮学報 第139輯  
文明のクロスロード MuseumKyushu第37号

京都市埋蔵文化財研究所調査報告 第9冊  
向日市埋蔵文化財調査報告書 第19・32集  
長岡京市埋蔵文化財センター年報 平成元年度  
京都の文化財 第9集、京都府古文書調査報告書—山城国綴喜郡八幡正法寺古文書目録一、埋蔵文化財発掘調査概報 1991  
京都府弥栄町文化財調査報告 第6集  
加悦町文化財調査報告 14  
朽木綱貞絵画  
福知山市文化財調査報告書 第19集  
長岡京市文化財調査報告書 第27~28冊  
丹後郷土資料館だより 第22号、特別陳列図録29 由良川の遺

京都府立山城郷土資料館	跡—私たちの考古学 II— 山城郷土資料館だより 第15号、企画展資料14 発掘成果速報 ～平成2年度の調査から～、展示図録11 京都府のはにわ 総合資料館だより No89
京都府立総合資料館 (財)京都府文化財保護基金 (財)京都古文化保存協会	文化財報 No74 会報 第71号
京都市文化観光局文化財保護課 亀岡市文化資料館 京都市歴史資料館	京都市文化財だより 第16号、京都市文化財ボックス 第6集 第7回特別展展示図録 天平の巨大プロジェクト国分寺 平成2年度 京都市歴史資料館年報、京都市歴史資料館紀要 第8号
宇治市歴史資料館 福知山史談会 京都考古刊行会	特別展 源氏物語の世界—王朝文化への憧憬— 史談ふくち山 第458～471号 京都考古 第61号
北野 重 小山 雅人 西中川 駿	柏原市文化財概報 1990—Ⅲ 日本歴史 第299号 古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経 路に関する研究
引原 茂治 藤原 秀樹	江戸遺跡研究会第4回大会発表要旨 発掘された江戸時代 鈴鹿市埋蔵文化財調査報告 I X

### 編集後記

1991年もあとわずかになりましたが、情報42号が完成しましたのでお届けします。

本号では、今年度の調査として特に注目を集めている樋ノ口遺跡について、寺院説と離宮説が浮上し、それぞれの立場から当センター理事でもある足利健亮氏と調査担当の伊野近富が自説を展開したものを掲載しました。また、韓国で最近注目を集めている伝天王寺跡の試掘調査の略報についても掲載することができました。よろしくご味読ください。

(編集担当=土橋 誠)

## 京都府埋蔵文化財情報 第42号

平成3年12月25日

発行 財京都府埋蔵文化財調査研究  
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3  
TEL (075) 933-3877(代)

印刷 有限会社 真 陽 社

〒600 京都市下京区油小路仏光寺上ル  
TEL (075) 351-6034